

平成 17 年度

奈良県公立学校優秀教職員
表彰実践事例集

平成 18 年 3 月

奈良県教育委員会

目 次

【小学校】

学校教育目標の具体化の部

- | | | | | |
|-------------|-------------------------------|--------------|--------|----|
| 1 | どの子にも「学校が楽しい！」と言わせたい | 田原本町立東小学校 | 澤田 政宏 | 1 |
| 学級経営の部 | | | | |
| 2 | 学ぶ楽しさを体感できる学級経営 | 吉野町立中荘小学校 | 岸本 直子 | 3 |
| 教科教育の部 | | | | |
| 3 | 少人数指導を効果的に展開するために | 斑鳩町立斑鳩東小学校 | 十文字 良明 | 5 |
| 4 | 言葉を育てて心を育む | 田原本町立田原本小学校 | 橋本 宗和 | 7 |
| 5 | 計算技能とともに数に対する感覚を豊かにする算数教育について | 下市町立下市小学校 | 今北 吉彦 | 9 |
| 6 | 算数科少人数指導の研究について | 葛城市立新庄北小学校 | 塚本 文哲 | 11 |
| 生徒指導の部 | | | | |
| 7 | 規律とあたたかみのある学校を目指して | 宇陀市立野依小学校 | 梶岡 俊之 | 13 |
| 道徳教育の部 | | | | |
| 8 | 心に響く道徳教育をめざして | 奈良市立伏見南小学校 | 中尾 三知子 | 15 |
| 総合的な学習の時間の部 | | | | |
| 9 | 地域の学習素材を生かした総合的な学習の創造 | 天理市立柳本小学校 | 藤宗 慶 | 17 |
| 国際理解教育の部 | | | | |
| 10 | 国際理解教育における小学校英語活動の取組について | 奈良市立椿井小学校 | 宮地 良春 | 19 |
| 健康安全教育の部 | | | | |
| 11 | 『からだと心』を守る保健主事の取組と実践 | 斑鳩町立斑鳩小学校 | 川村 浩嗣 | 21 |
| へき地教育の部 | | | | |
| 12 | 生き生きと表現する子どもをめざして | 十津川村立西川第二小学校 | 内山 孝男 | 23 |
| 研修推進の部 | | | | |
| 13 | 学校の活性化を図る研修の在り方について | 平群町立平群南小学校 | 森本 恵 | 25 |

【中学校】

学年経営の部

- | | | | | |
|-------------|---------------------------------------|----------------------|-------|----|
| 14 | 生徒たちの夢と希望を出発点とした学年経営について | 川西町・三宅町立下中学校組合立立下中学校 | 中本 克広 | 27 |
| 教科教育の部 | | | | |
| 15 | 中学校社会科における絶対評価の方法に関する実践的研究 | 曾爾村立曾爾中学校 | 中山 眞一 | 29 |
| 生徒指導の部 | | | | |
| 16 | 家庭訪問をとおして地域に入り込み、徹底して子どもを理解する生活指導について | 御所市立大正中学校 | 椿 隆一 | 31 |
| 17 | 地域の特性を生かした連携と生徒指導の在り方 | 五條市立五條中学校 | 上西 秀樹 | 33 |
| 総合的な学習の時間の部 | | | | |
| 18 | より楽しく、よりやる気のでる調べ学習について | 香芝市立香芝中学校 | 高谷 國弘 | 35 |

部活動の部			
19 「出会い」	宇陀市立菟田野中学校	田川 倉義	3 7
学校教育推進の部			
20 教務の仕事を通して	橿原市立八木中学校	浦野 祐治	3 9
図書館運営の部			
21 学習の拠点となる図書室をめざして	東吉野村立東吉野中学校	中西 智子	4 1

【高等学校】

学校教育目標の具体化の部			
22 奈良県立奈良北高等学校理数科設置に伴う企画・立案・推進について	奈良県立奈良北高等学校	藤村 俊文	4 3
23 地域と連携した教育活動の実践	奈良県立吉野高等学校	森 林 科 学 科	4 5
教科教育の部			
24 数学的な発想の向上を目指した実践について「柔軟な思考力を伸ばす問題に取り組む」	奈良県立奈良高等学校	竹村 謙司	4 7
25 郡山高等学校における家庭クラブ活動を通じた、高校生の地域参加と他人を思いやる心の育成について	奈良県立郡山高等学校	仲田 千鶴	4 9
26 授業で学習した知識を伸ばす作品製作と全国への出展を通して	奈良県立王寺工業高等学校	岡田 晋	5 1
27 十津川地域に根ざした特色ある学習指導	奈良県立十津川高等学校	浅見 卓	5 3
生徒指導の部			
28 よりよい生徒指導の推進に向けて	奈良県立広陵高等学校	田淵 太	5 5
29 教育相談を通しての生徒理解の深化と指導の充実について	奈良県立上牧高等学校	東 孝次	5 7
総合的な学習の時間の部			
30 「総合的な学習の時間」の全体計画と運営	奈良県立奈良工業高等学校	鍵本 光弘	5 9
31 総合的な学習の時間を生かす教育実践の在り方	奈良県立高田高等学校 総合的な学習の時間「探究」開発室		6 1
進路指導の部			
32 「インターンシップ」を基とする「生きる力」の育成	奈良県立室生高等学校	西浦 太衛門	6 3
障害児教育の部			
33 『個別の教育支援計画』の策定が叫ばれる今、知的障害養護学校が果たすべき役割は	奈良県立大淀養護学校 教務部「PEP-R」検査と自閉症発達支援教育研究グループ		6 5
健康安全教育の部			
34 小さな部屋からの発信	奈良県立香芝高等学校	藤岡 夏枝	6 7
部活動の部			
35 弓道部の活動を通して、社会人としての素養を会得させる指導について	奈良県立平城高等学校	伊東 久志	6 9
36 無限の可能性を求めて	奈良県立片桐高等学校	安井 浩	7 1
37 部活動を通して「自己を磨き、未来に挑戦する」生徒の育成について	奈良県立榛原・榛生昇陽高等学校	徳地 末広	7 3

事例番号1 小学校 学校教育目標の具体化の部

どの子どもにも「学校が楽しい!」と言わせたい

- 自信・人間性・働くプロジェクト -

田原本町立東小学校 澤田 政宏

1 実践内容

本校は、歴史ある古くからの農村地帯であり、景色が美しく自然豊かな学校である。この子どもたちにどんな力をつけ、どんな感性をはぐくんでいくことが大切であるかを考え、話し合う中でプロジェクトが始まった。私は、主として「働く」プロジェクトにかかわっていた関係上、その内容を報告の中心とする。



(1) プロジェクトの内容

ア プロジェクト1「子どもたちに自信を」・・・勉強や運動に自信をもたせる。

(ア) 学力の基礎をきたえる

計算力の診断調査を行い、実態に合わせた指導を強化し、計算能力をアップする。
詩を暗唱して発表するなどの朗読大会を行い、読む力をつける。

(イ) 体力をつけ、運動能力の向上を目指す

外遊びを奨励したり、縄跳び集会など様々な運動を取り入れた集会を企画したりして、子どもたちの体力アップを図る。

イ プロジェクト2「豊かな人間性を育てよう」・・・特に、読書活動と音楽活動に力を入れる。

(ア) 昼休みに町おはなし会の方々や教師、子どもたちによる「ちょっと昼どきおはなし会」を運営する。

(イ) 読書活動を充実するために、朝の読書タイムを設定したり、良書を紹介したりする。

(ウ) 校内ミニミニコンサートを行い、音楽に親しませる。

ウ プロジェクト3「働く子どもたちに」・・・働くことを通して、自主性や豊かな心、たくましい体力を育てる。

(ア) 手づくりのビオトープ(メダカ池)の設置

まず、水生生物の生息状況を調べ、川の水の汚れを調査した。その結果、自然豊かな地域であるが、川は大変汚れていることが分かり、理想の環境を学校の中に再現するために、ビオトープを作る。



(イ) プール掃除、運動場の草引きや石拾いなどのボランティアの募集

働く子どもたち

自分たちの学校を自らの手で環境を整えるために行っている活動である。プール掃除や運動場の草引きや石拾いなどの活動を行う。

(ウ) 運動会で働く子ども

子どもが応援などの係活動に主体的にかかわり、活躍できる場面を増やす。

(エ) 常の委員会活動や当番活動に主体的にかかわる。

エ 「働く子どもたちに」で子どもにつけたい力

このプロジェクトで目指したものは、ビオトープを作ることやプールの掃除などをすることだけではない。これらの作業を通して、達成感を味わいながら子どもが楽しく「生きる力」をつけることである。

(ア) 問題解決的な力が育つ

実際に行動を起こしてみると、やり遂げるためには様々な困難に出会う。ビオトープ作りを例に挙げると、あらほりの段階で大きな石が土の中から出てきた。機械でつり上げないと石を外へ運ぶのは無理だろうと考えた。しかし、子どもと相談すると石に縄を巻いて、棒で担ぐと何とかできるのではないかということになった。見事、6年生の子ども5人で持ち上げることができた。このように、困難なことに出会った時、その事象を克服するために子どもは必死に考え、実行に移す。生きた問題解決的な学習であると考えられる。

(イ) 友だちと協力する力が育つ

大きな作業をするとなると、自分一人ではできないことといえば、たかがしれている。しかし、みんなで力を合わせるとやり遂げることができる。作業を通して、友だちと仲良くなり、仲良くなったことでより仕事はかどる。そして、作業中の子どもの様子を観察することによって、教師の子どもを見る目も変わる。子どもの可能性がどんどん広がっていくように感じられる。

(ウ) 体力がつく

今年の組み体操では、肩車やサボテンが例年になく早く完成することができた。作業を通して、子どもたちに知らず知らずの間に体力をつけることができた一つの証ではないかと考えている。

2 成果及び課題

(1) 各プロジェクト推進による児童の変容

ア 基礎的な計算力は、徐々にではあるが付いてきている。しかし、自ら問題を見つけたり、自ら追究したりするなどの問題解決能力は、まだまだついていない。

イ 本好きの子どもが増えてきている。読書を通して、豊かな心が育ってきている。

ウ 自分が活躍できる場所ができ、働くことに喜びを感じる子どもが出てきている。

(2) 「働く子どもたちに」で子どもにどんな力をつけることができたか。

ア 実際に行動を起こしてみると困難に出会い、その事象を克服するために考え、実行に移した。生きた問題解決的な学習であると考えられる。しかし、児童自らが計画していく力はまだ付いていない。

イ 作業はみんなで協力しないとできないことが多く、そのことを通して友だちとの関係が深まり、仲良くなることができた。

ウ 作業を通して、子どもたちに知らず知らずの間に体力をつけることができた。

以上のように、様々な活動をすることで、「学校が楽しい」と、考える子どもが増えてきている。不登校児が、ゼロなのもこの現れであると考えられる。

3 その他参考となる事項

特になし

事例番号2 小学校 学級経営の部

学ぶ楽しさを体感できる学級経営 ～ 少人数の特性を生かす ～

吉野町立中荘小学校 岸本 直子

1 実践内容

全国的に児童数が減少しているが、本校でも近年少子化が急速に進み、合併問題が話題となっている。そんな中で、小規模校（1年生2名、2年生2名、3年生11名、4年生2名、5年生14名、6年生10名）の特性を生かし「中荘たんけん」や学級活動、全校集会への参加のさせ方について実践し、それらの楽しい体験学習を通して「生きる力」を身に付けていけるように年間を見通し、計画的に取り組を進めてきた。



(1) 中荘たんけん

本校はかつて吉野離宮が建っていたという地にあり、四季折々の移り変わりが身体で感じられる自然環境に恵まれた学校である。しかし、少人数であるがため、家で一人遊びをすることが多く、友だちと遊ぶ場合でも保護者に車で送迎してもらっていることが多い。そのため、地域を知る・歩くという経験はほとんどないようであった。そこで、児童にとっての生活の場でもある地域をよく知ろうということで、「中荘たんけん」を計画した。

まず、家族や身近な人から自分の周りの様子を聞いて友だちに紹介するという活動から始め、そのおすすめの場所に友だちを案内した。地域を探検していく中で、出会った人たちにあいさつをしたり、インタビューをしたりすることで多くの人とのかかわりや交流ができた。子どもたちが発見した地域の秘密やインタビューをグループごとに新聞にまとめ、そこからは、お互いに友だちの様々な気付きや地域の新たな様子を知ることができたように思われた。案内するのだという意欲は、新たな発見を生み、一人一人の好奇心や探求心をより活発な活動にと展開していった。また、地域へ出かけたことにより、身近な自然に触れ、草原で見つけた「のびる」をみんなで摘んで、餃子作りなど自然の物を使って遊ぶ楽しさも味わうことができた。

(2) 児童集会

少人数であるため、話し合い活動ができにくい状況にある。そこで、話し合いの方法を身に付けさせたり、協力して話し合い活動ができるように、低学年学級会として1年生から3年生の児童がいっしょになり、運営委員会から提案された議題で話し合い活動を進めてきた。

高学年が中心となって取り組み、学期に1回の児童集会には、楽しい活動をみんなで協力して意欲的に創っていくのだと次のような集会を実施した。



手作りボート

1学期児童集会 『プールだよ！全員集合！！』

・縦割り班グループで協力して作った手作りボートでの競走や島渡り競走、シン

ク口競技、水中騎馬戦、宝探し競走など、自分たちが考えた水中競技に協力して楽しく参加することができた。

2 学期児童集会 『中荘まつり 2004!』

- ・神輿やだんじりを低学年で作って、祭りを盛り上げようと取り組んだ。どのような大きさの神輿やだんじりを作るのか、どのような材料を使って作るのかなどグループで計画を立て、仕事の分担を決めて作り上げていった。神輿やだんじりを引くときには、自作のはっぴを着て会場を練り歩き、自分たちの手で創りあげることができた喜びも味わうことができた。



中荘まつり

3 学期児童集会 『6年生を送る会・・・6年生を泣かそう・・・』

- ・6年生のこの1年間の活動の中から、強く心に残ったことを劇にして見てもらった。全員が役割を分担して取り組み、しっかり表現できたという満足感や6年生の人に感謝されたという喜びを味わうことができた。

2 成果及び課題

本学級は低学年少人数の編成であるため、全校集会や児童会活動には中荘小学校の児童の一員としての自覚をもち、意欲的に参加し、活動ができるように計画して取組を進めてきた。「プールだよ!全員集合!!」「中荘まつり 2004!」などの楽しい活動を通して、子どもたちは成就感や達成感を味わい、次の学習への意欲を高めることができた。生活科や集会活動を通して一人一人の考えや思いを生かしていく取組を意図的、計画的に実践し、また、地域の人や物などに触れることによって、地域に対する思いが深くなっていったように感じる。しかし、学校合併問題を目前にして、これから先どこまで地域学習を根付かせていけるだろうかという不安もあるが、地域とのつながりを大切にし、学校生活を更に豊かなものとなるようこの実践を続けたい。

3 その他参考となる事項

平成16年度より地域の体育協会と共催で運動会を実施している。

『地域とともに・・・広げよう中荘の輪・・・』というテーマのもと、教育の日の取組として、地域を教材とした学習の様子を地域の人に公開している。公開授業後、地域の人から学ぶということで、地域の名人さんから、わらざうり作りや花籠作りなどを親子で教わった。

事例番号3 小学校 教科教育の部

少人数指導を効果的に展開するために

- 習熟度別（進度別）少人数授業を通して -

斑鳩町立斑鳩東小学校 十文字 良明

1 実践内容

少人数指導でより効果的に指導を展開していくためには、単元による集団の構成の仕方や、指導の個別化の在り方についての研究、また担任との連携の仕方等について研究していく必要がある。



(1) 少人数指導の指導形態の工夫

教科の特性や単元の内容に応じたグループを構成していった。

ア 均質二分割・・・学級を無作為に2つに分け、少人数による授業を行う。

イ 習熟度別二分割・・・習熟度によりグループを2つに分け、少人数による授業を行う。様々な指導形態を考えたが、児童が戸惑うことがないようにとの配慮から、この2つの形態で授業を進めた。特に、基礎・基本の確実な定着をはかるには、習熟度別の二分割が適していると考えた。

(2) グループ分けの留意点

習熟度別少人数授業のグループ分けでは、子どもたちどうしの人間関係や保護者の考え方にも留意していく必要がある。グループの名称も「じっくりコース」と「どんどんコース」と命名し、あくまでも子ども自身による選択を原則とした。オリエンテーションを開き、グループ分けの意義及び自分にあったコースの選択をするよう呼びかけ、途中でのコース変更も可能であることを話した。また、事前に自己診断テストを行い、選択への資料とした。

(3) 少人数指導の実際

単元名 「割合とグラフ」

- ・ 児童はこれまでの学習でも、割合の素地なる経験はしてきている。しかし、これまでの「比較」の考え方は、差の考え方をを用いて数の大小の比較をしてきており、基準量を「1」に置き換えて倍の意味を理解するという考え方は初めての単元である。また、児童が割合の意味を理解するには、すぐに式で求める方法を学習するのではなく、基準量・比較量・割合の関係を線分図などに表す活動に重点を置きたいと考える。具体的な内容は、次の通りである。

ア 割合は2つの数量において、基準量「1」に対する 倍で表したものであること。

イ 基準量・比較量・割合の関係を明確にして線分図などに表すことができること。

ウ $(\text{比べる量}) \div (\text{もとにする量}) = (\text{割合})$ の式を使って割合を求めること。

エ 比の3用法から、基準量・比較量を求めることができること。

オ 基準量の大きさを10 とみたり、100 とみたりして歩合や百分率で表すこと。

特にウに重点を置きすぎないように、アとイを大切に学習を進め、もとにする量の割合がどんなときも1と見なして、もとにする量に対して、比べる量がいくらの

割合になるかを理解させることに指導の工夫を置いた。

- ・ 「じっくりコース」においては、子どもたちの学校生活の一場面として、ゲーム大会の各ゲームの定員と希望者の関係をテープ図に表し、基準量を「1」にそろえて、倍の考えで比較する割合の意味を理解させていった。
- ・ 「どんどんコース」においては、乳酸飲料の全体の量と部分の量の関係を線分図に表し、比較量が基準量の小数倍であることを説明できるということを目指した。

(4) 「じっくりコース」での授業の展開

ア 前時の復習をする。

イ 課題をつかむ。「希望者が定員の何倍かをテープ図に表して、入りやすさを比べよう」。

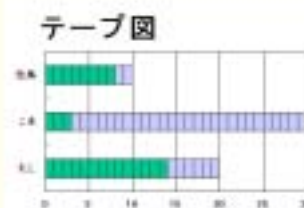
ウ 缶馬と数量の関係をテープ図に表して考える。

エ 調べた結果を発表する。

オ まとめをする。

カ 算数作文を書く。

- ・ 自分なりに、全体と部分の関係を調べた方法を説明できるということ大切にしながら、まとめにおいては、パワーポイントでテープ図を見て「1」が揃うことの意味が理解できるよう配慮した。



2 成果及び課題

パワーポイントによるプレゼン

基礎・基本ということを考えると、「生活に生かせる基となる基礎・基本」ということが大切である。つまり、算数で学習することが、自分たちの生活での事象を簡潔に、また、的確にとらえたり、表現したりする基になるものであると思う。少人数指導の習熟度別で学習することの良さは、まさに基礎・基本を大切にすることにつながっていると言える。特に今回の実践では、「割合とグラフ」という子どもたちがつまずきやすい単元であるだけに、習熟度別にすることで、子どもたちが自分にあったコースでじっくりと考え、課題追求をし、表現できたという点において一定の成果があったと思われる。

また、子どもたちの感想の中にも「手を挙げて発表しやすかった。」「最後でパソコンの図をみて、頭の中が整理できた。」「説明するのはむずかしかったけど、授業はよくわかった。」等、子どもたちも自分にあったコースで学習できたことがうかがわれる。

授業中に個人が活動できる場が増え、あまり発表できなかった児童が進んで発表し、主体的に学習する児童の姿が見られるようになった。また、学習に意欲をもつ児童が増加しつつあり、根気強く練習問題に取り組む姿が見られるようになった。

今後の課題としては、より効果的な指導を展開していくための、単元による集団の構成の仕方や、指導の個別化の在り方についての研究、特に、担任との連携の仕方について研究していく必要がある。また、児童一人一人の実態を把握し、担任とともに、単元のどこをどのような方法で教えていくのかということ常々研究していく必要がある。

3 その他参考となる事項

斑鳩町立斑鳩東小学校ホームページ

<http://www4.kcn.ne.jp/~ikarugae/>

言葉を育てて心を育む

人間関係形成能力を高める「話すこと・聞くこと」の指導

田原本町立田原本小学校 橋本 宗和

1 実践内容

児童生徒の悩みの原因は、人間関係上の問題からくることが非常に多い。それらは、人と人のかかわりの中にある言葉の問題でもある。人間は、言葉によって思考するのであり、子どもたちの思考力を豊かに高めることで関係性もよくなる。そのために、子どもたちの語彙を増やし言葉の学習を大切にしてきた。ここでは、言葉を媒介として人間関係を作る力、すなわち、人間関係形成能力を高める国語科の実践の一端を紹介する。



(1) 自分も相手も気持ちよくなる魔法の言葉「あいさつ」

あいさつは、人と人との関係を成立させる上で、その架け橋となるものである。「あいさつをしましょう。」という掛け声に付け加えて、あいさつをされた時の心地よさを体感させる取組を進めることにした。「相手の名前を呼んでからあいさつをする。」「あいさつに言葉を付け加える。」「その場の様子を伝えてからあいさつをする。」そうすることで、あいさつも気持ちのよい言葉となる。

たとえば「おはよう」のあいさつを、「 さん、おはよう、今日も元気かい」としてみてはどうだろう。一人一人が、自然にあいさつに言葉を付けたすことができると、そこから対話が始まりコミュニケーションが成立する。「ありがとう」の言葉も「 さん、ありがとう、あのときはとても嬉しかったよ。」としてみる。教室でこのようなあいさつを数多く見つけ出し、友だち同士で実際に体験してみることにした。国語科の「話すこと・聞くこと」の学習時間、教室中が気持ちのよいあいさつ言葉でいっぱいになり、とても温かい雰囲気包まれた。

(2) 聞く子は育つ

家庭において「寝る子は育つ。」と言われるが、学校においては「寝る子は困る。」であり、話をしっかりと「聞く子は育つ。」のである。それでは、話を聞く力をどのように身に付けていけばよいのであろうか。教室では、「聞く」という行為の指導より、自分の話を聞いてもらったときの心地よさを体感できるようにしている。上手な聞き方のできる人は、話し手を楽しくさせるものである。聞き手と話し手が双方向に言葉を交わすコミュニケーション場面においては、上手な聞き方、上手な話し方が対話成立の条件となり、人間関係形成能力の基本であると考えられる。教室で、A・B二人一組になり「昨日学校から帰ってからのことを、相手に詳しく伝えよう。」という対話場面を設定した。

A（話し手）昨日学校から帰ってからのことをBさんに分かってもらうように話す。

B（聞き手）「指示カード」の通りにAさんの話を聞く。

次に、話し手と聞き手が交代するといった対話場面の設定である。聞き手に対しては、次のような三枚の「指示カード」を出した。



授業風景

- ア つまらなそうに聞く。(あくび、無視)
- イ えらそうに聞く。(あっそう、よかったね)
- ウ 話しやすい聞き方で聞く。(相手を見て、にこやかにうなずいて)



授業風景

聞き手にこのような「指示カード」を見せて二人の対話を始めてもらおう。「指示カード」段階において、話し手は、一生懸命に昨日の放課後のことを話すが、どうも相手の応答が不自然であり、対話が続かない。感情応答不全を起こす対話場面を意図的に設定することで、それとは逆の聞き方こそ、相手に気持ちのよい感じを与えるのだということを体験を通して学ぶのである。

(3) 支持的な言葉かけを増やすと、子どもは自信をもつ

人間関係形成能力を身に付けるためには、日常の無意識に発せられる言葉の中に、支持的態度が必要である。近頃、「そうだね。」「どうしたの。」「よくがんばったね。」「そういうときは、本当につらいね。」「友だちを大事にしているね。」などといった言葉かけが少なくなってきているように思われる。これらの言葉の中には、大人から子どもへの温かい心のこもったメッセージが含まれている。人と人との関係の中で必要な技能(スキル)を、短い言葉の中で伝えている。他者から認められ、支持された言葉をより多く受けた子どもは、自ずと自尊感情が高まり自信をもちながら歩み出すものである。

(4) 対立解消の力をつける

関係の深まりとともに、対立は付きものである。そこで、高学年の児童には、対立解消の力も付けていく必要がある。下級生のトラブルを解決していくこと、また、自らの問題を解決していくことは、学校のリーダーとして活躍する上級生に必要なスキルであると考えられる。国語の時間に導入した対立解消プログラムは、概ね次の三段階で構成されている。

- ア トラブルの仲裁に入って、解決のために話し合うという当事者の同意を得ること。
- イ 両者の話を中立の立場で聴くこと。
- ウ 解決策を導き出し実行すること。

具体的な対立場面を想定し、ロールプレイを通して身に付けた対立解消の力は、高学年の子どもたちのリーダーシップを高め、学校生活に生かされた。

2 成果及び課題

コミュニケーション能力を高める取組を学校内で行うことにより、児童の「聞く力」が高まってきた。それは「聞き取る力」であり「聞き分ける力」でもある。更に、高学年においては「聞いて比較する力」となっている。また、総合的な学習の時間等におけるプレゼンテーション能力の高まりも感じられる。国語科で学んだ「話すこと・聞くこと」の力を十分生かせる場を意図的に設定することで、子どもたちの言葉の力もより一層高まりを見せた。今後は、児童生徒の人間関係形成能力を高めるために、個々の「考える力」「想像する力」「創造する力」に焦点を当てた実践的研究を進めていく。国語科の指導を通して、子どもたちの論理的思考力や人間関係形成能力を高めていきたいと考えている。

3 その他参考となる事項 <参考文献>

- 橋本宗和 2004 言葉を育て心を育む教育の創造『やまと』 331奈良県教育振興会
- 橋本宗和 2005 学習のつまずきを解決『児童心理』 831金子書房

1 実践内容

(1) 数感覚（数感覚の一般的な特徴）について

数感覚（number sense）については、最近になってアメリカの研究論文などに取り上げられるようになってきた。その理由は、小学校の算数において、数は何を意味しているかということを理解するような、数についての強い概念を児童に発達させることに成功していないからであった。そして、その目的を達成するために数感覚が強調されるようになってきたようである。では、数感覚とは、一体どのようなものなのだろうか。このことについて、J.Sowderは、量的な直観力、数で表された量に対する感覚が、最近、数感覚として呼ばれるようになってきたと述べている。



また、『スタンダード』では、数感覚は、数の様々な意味のすべてから引き出された数についての直観力であると述べている。

以上の説明から、数感覚についての説明は様々であり明白な定義はない。しかしながら、J.Sowderは、数感覚を定義することは困難であるが、数感覚をもつ児童は、数感覚の存在を論証するふるまいをすると述べ、数感覚のある者の特徴を明らかにした。それらを、例とともに列挙すると次のようになる。

ア 数を異なる表現に柔軟に変える能力

例 12×25 を暗算で行う前に、25を $100/4$ と考え、 3×100 として計算すること。

イ 数を合成したり分解したりする能力

例 $34 + 28$ を暗算で計算するために、28を20と8に分解し、34と20で54、8を加えて62とるように考えること。

だいたいいくらかなあ?

ウ 数の相対的な大きさを認識する能力

例 $1/4$ は、 $1/8$ よりも大きく $1/3$ より小さいこと。

エ 数の絶対的な大きさを取り扱う能力

例 一度に1円玉で1万円分は持てないことや、100万人は、ロックコンサートに出席できないことを理解すること。



オ 基準となるものを使用する能力

例 基準になるものとして1を使用すれば、 $7/8$ と $9/10$ の和は、それぞれの分数が1より少し小さいゆえに、2より小さくなくてはならないこと。

買い物の場面

カ 数についての演算の結果を理解する能力

例 $348 - 289$ が59ならば、 $358 - 289$ は69であることがわかること。

キ 数の性質や演算の性質を利用した「創作された」方略を用いて暗算を行う能力

例 $1000 - 748$ を見いだすのに、748は52で800に、そして200で1000となるよう

に、数え上げることで答えを得るようなこと。

ク 見積もりをすることがふさわしい場面を認識し、柔軟に数を扱うことで、答えの見積もりができる。

例 $3388 \div 7$ を見積もるのに、3500は7で割りきれるので、この問題を $3500 \div 7$ に変えることによって見積もった児童は、数についての柔軟性を例証している。

ケ 数の意味を理解することへの意欲

例 子どもたちは、算数が感覚を作り、数に関する活動において感覚を見いだすことができる信じなければならない。この意向は、答えの妥当性についての判断を、児童が個々に行うことによって導かれるであろう。

(2) 指導について

$1/4$ 、 $2/3$ 、 $1/8$ の3つの分数の大きさを比べる授業の展開を6年生で考えてみよう。

まず、児童に自力解決をさせた場合、ほとんどの児童が通分をし3つの分数の大きさを比べていた。その後、「0」「1」を基準とすることを示し、3つの分数のうち「0」に近いのはどれ、「1」に近いのはどれと発問する。そのことによって $1/4$ は、「0」に近い、 $2/3$ は「1」に近い、ゆえに $2/3$ は $1/4$ より大きいことに気付く。また、同様に、 $1/4$ は $1/8$ より大きいことが分かり、量として分数をとらえることができた。



ある分数は \square に近い

2 成果及び課題

数感覚は、複雑であるがために授業において直接的に教授できないものであり、また、数感覚を身に付けることを直接のねらいにすることも避けなくてはならない。暗算や数の大小比べなどのような計画的な活動を通し数感覚の発達を促したいものである。それによって、数感覚を身に付けた児童は、筆算などの答えを見積もることで大きな計算間違いを防いだり、買い物の場面などの実生活においても活用したりしている。しかしながら、計算能力や計算の速さを重要視している児童たちに「算数が感覚を作り、数に関する活動において感覚を見いだすことができる。」ということを十分に気付かせていない。重要なことは、子どもたちが算数的な場面を理解するような励まし、挑戦させる我々教師の役割であろう。それ故、以下のような問いかけを授業中に投げかけたいものである。

「どのようにして答えを求めましたか。」「別の方法で答えを求めることができますか。」「求めた答えは適切ですか。どうやって分かりますか。」

3 その他参考となる事項

参考文献 Judith T. Sowder, Research on Number Sense: What It Has to Say to Teacher, San Diego State University, 1989.

1 実践内容

算数科における効果的な少人数指導のあり方を、授業設計、授業実践、評価の3つの段階で明らかにしてきた。

まず、授業を設計する段階において、少人数指導では、今まではできなかった様々な指導形態を設定することができる。複数の教師による指導ということで、同一教室において役割分担をして指導するTT指導と複数教室に分かれて指導する分割指導がある。分割指導においては、単純にクラスを二分割する方法、考え方や理解の程度が均等なグループに分割する方法、学習課題を児童自身が選択する課題別分割法、そして習熟の程度にあわせた分割法などがある。今回の実践では、これらの授業形態を学習内容や単元の特性に応じて設定することはもちろんであるが、児童の実態や学級の学習実態に応じて設定することを検討し、さらに様々な授業形態を組み合わせることで効果的な授業形態を作り出す研究を進めてきた。



次に、少人数指導を実際に進めながらその課題となる点をひとつひとつ解決してきた。児童にとっても初めてとなる少人数指導を進めることで、確かに教師と児童との距離を縮めることになった。「すぐに先生に聞ける。」「発表してみようという気になる。」と、児童の反応は良かった。しかし、複数の教師が連携を取るために時間と労力がかかった。放課後の少しの時間を見つけて、打ち合わせの時間を重ねてきた。そんな中で、今まで気付かなかった児童の姿がはっきりと見えてきたのである。また、「学習内容が十分に理解できていない児童に対して、できるだけ丁寧に、繰り返し基本に戻って学習できる展開を設定することが大切である。」と考えがちになるのは、教師側だけの判断で、児童にとってはもっと整理されたスムーズな展開が必要だったといえる。こうした授業実践の積み上げによって見えてきたことが、次の授業計画につながっていった。

最後に、研究の中で大切にしてきた取組として、学習感想『ふり返りシート』を使った評価がある。学習の終末の時間をメタ認知の時間に当てて、自分の学習をふり返る機会をもつようにした。はじめは、分かったことなどをまとめて書くだけであったが、何度も書くことを重ねることで、「なぜ分かったか。」「どこで間違えていたのか。」「次にはこうしたい。」など、自分の学習を分析する自己評価の表現が増えてきた。少人数で学習するコースを選んだりする際には、自分自身の学習を評価する力は大変有用である。また、この『ふり返りシート』を積極的に教師も評価に生かす取組として、評価の判断基準に明確にあらわすことにも取り組んできた。児童の言葉に赤ペンで指導を入れながら、次時の授業設計を見直す機会となった。

このように、少人数指導をすすめるに当たっては、どんな場面においても、児童の実態を確実に把握することが大切だということがクローズアップされてきた。

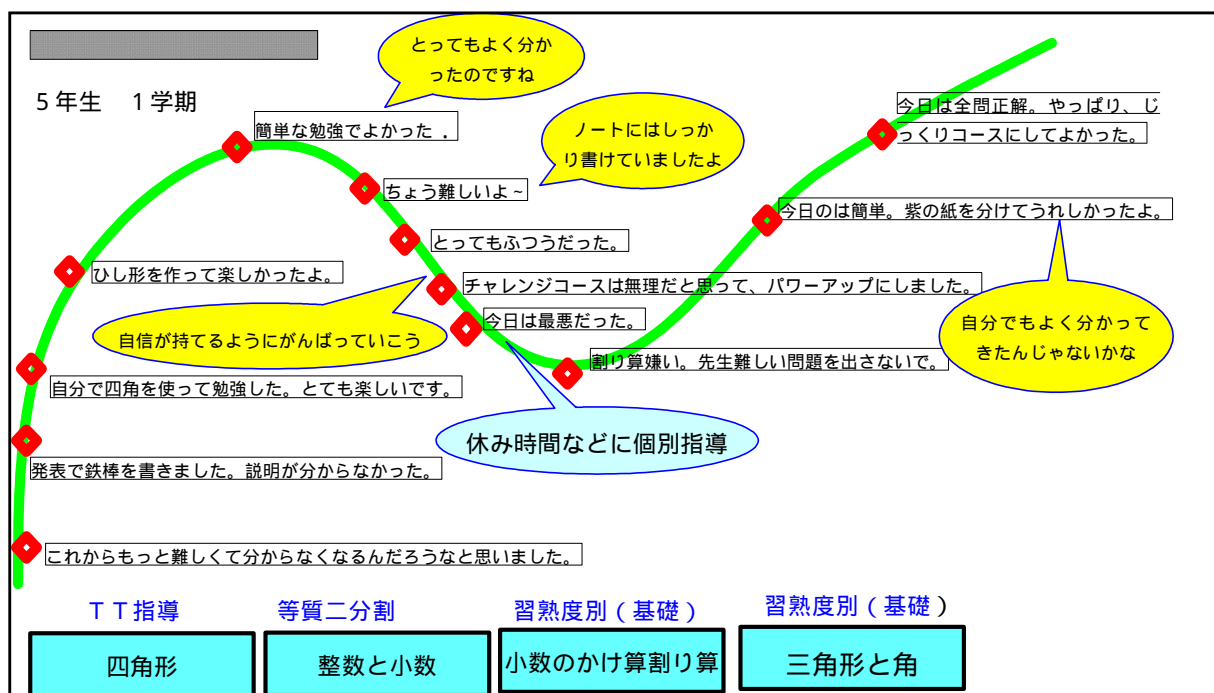
2 成果及び課題

3年間学力向上フロンティア校として、算数科少人数指導の研究に取り組んできたことで、児童の学力は確かに向上してきた。特に教研式学力診断テストにおいて、数学的

な考え方の観点では大きな伸びを示すようになった。これは「なぜだろう。」と理由を考えるふり返りの時間を大切にしてきたことの成果だといえる。メタ認知の高まりが見られている。

また、『ふり返しシート』については、教師側の児童把握の方策というだけではなく、子ども自身の「学びの足跡」となっている。下記の図のように『ふり返しシート』に表れる子どもの情意的側面をたどると、なだらかな曲線を描き山になり谷になりしながらも、自分の学習に自信をもったり、不安になったり、意欲を持って取り組もうと考えたりしながら分かるようになっていく変化がうかがわれる。研究のテーマであった「個に応じた指導」のために、この取組から児童一人ひとりの状況を的確に把握することができた。児童の興味・関心がどんな点にあるか、一人ひとりの理解の程度はどうか、つまりいっているのか、また、個が集団の中でどのような状況にあるか、そして教師と児童とのかわりの様子はどうかなど、児童の実態を多角的に、継続して把握することができたと考えている。

更に「個」が見えてきたとき、その「個」に対してどのような指導形態をもって当たれば効果があるのか、どのような教材・教具を用いればより分かりやすいのかといった指導についての在り方が見えてきた。



この算数科における研究の成果を、他の教科にも生かしていくことが大きな課題である。どんなときにも複数の教師が児童を確実に把握して協力して指導に当たることが大切である。また、自分の考えを相手に伝える力が弱いという児童に対して、表現する力を育てていくことが、更なる理解につながっていくことが考えられる。そこで基本的な言語力の向上も課題である。

3 その他参考となる事項

葛城市立新庄北小学校ホームページでは、学習指導案を公開しています。

<http://www.academic.city.katsuragi.nara.jp/shinjokita-syo/>

1 実践内容

本校の児童は明るく素直で、元気に学校生活を送っている。しかし、基本的な生活習慣の定着が不十分であったり、自分の気持ちを相手にうまく伝えられなかったりする児童もいる。このような児童に寄り添い、励まし、時には厳しく指導して、規律とあたたかみのある学校を目指して、全校体制で取り組んでいる。



(1) 基本を重視した生活指導

ア あいさつ運動

あいさつを元気よくするために、全校あいさつ運動を続けてきた。校門に立って登校して来る児童一人一人の顔を見てあいさつを交わしたり、集団登校について指導したりしてきた。なかなか大きな声であいさつができなかったり、目と目を合わせることができない児童がいたが、日を重ねるにつれ、進んであいさつができるようになってきた。また、児童は横断歩道を渡るときに、自動車が止まってくると帽子を取って頭を下げるようになってきた。停止してくれた運転手も笑顔で横断を見送ってくれている。児童のあいさつが、朝のひとときのさわやかさを生み出している。

イ 集合時間を守る

集団生活で時間を守ることは、人に迷惑をかけない基本のルールである。以前は、集会に遅れても平気な顔をしている状態であったが、集会の始まりを定刻にできるように継続して指導した。放送委員会が5分前に集合の音楽を流すと、一斉に行動するようになった。遅れた児童には注意をし、なぜ集合時間が大切かを繰り返し指導した。その結果、集会の開始時刻前に全校生が集合できるようになり、気持ちのよい朝のスタートができるようになった。

(2) やさしさを培う菊の栽培活動

「満開の菊で学校を飾ろう。」と6年生に提案して、一人一鉢の菊栽培を今年も始めた。水やり、植え替え、施肥、支柱立てなど、11月の開花まで目を離すことなく世話を続けた。児童は夏休み中も水やりをするために交代で登校した。また、台風が接近すると菊を校舎内に避難させることもたびたびあった。児童は登校するなり自分の菊のところに立ち寄り、害虫を捕ったり、わき芽を摘んだりしている。こうした体験を通して、菊に愛着を感じ、菊の命を大切にしようという気持ちが強くなってきた。秋には咲きほこる菊を玄関に並べて、全校生で楽しんだ。また、菊を絵に描いたり、俳句の題材にしたりする様々な取組へと発展させた。



明日には 咲いてほ しい花	ぼくの菊 虫が食べた がたんぼ った
---------------------	-----------------------------

(3) 異年齢集団でリーダーシップを養う

一人一鉢の菊栽培

ア 全校草引き作業

運動場に生える草を、できる限り児童の手で除草している。当初は学年単位で作業をしていたが、縦割り班で作業することにより、6年生が草引きの指示をしたり、草集めをするなど自覚をもって作業をするようになった。「草いっぱい運動場がきれいになって気持ちがいい。」と、感じる事ができる児童に育てるため、引き続き取り組んでいきたい。

イ 運動会種目「パフォーマンス」を児童の力で

4年前より、異年齢の児童が共に活動する場として、運動会種目「色別パフォーマンス」の導入を図った。高学年は、リーダーシップを発揮して、自分たちが考えたダンスを低学年に教える。また、低学年は高学年に協力する態度を身に付けることがねらいである。高学年は曲の振り付けを何時間もかけて話し合った。練習を始めてもなかなかスムーズにいかず、「下級生にどのように説明したら分かってくれるのか？」などの悩みが出てきた。担任としてその悩みを受け止め、励ましながら、演技が完成するのを見守ってきた。運動会が間近になると高学年はパフォーマンスの完成をめざして一生懸命になってきた。運動会で自分たちがつくり上げた演技を成功させたことで自信がつき、一回り大きく成長した。保護者・地域の方々も、児童の自主的な活動をよく理解されて、毎年楽しみにして運動会を観覧されている。

(4) 全校生の心を一つにする野焼き

児童の連帯感を高めるために、全校生105名で粘土作品の野焼きをした。各学年が動物やお城などのテーマで粘土作品を作った。全校生の作品を運動場に集めて、たきぎで野焼きをした。火の番は各学年が分担して行い、朝から夕方まで火の番のリレーをした。火の勢いは徐々にあげていかないと作品が割れてしまうので、どの学年も責任が重い。



野焼き

自分たちの担当を一生懸命に果たして、次の学年に引き継いでいった。あくる朝、焼きあがった作品は体育館に展示して、みんなで力を合わせて成し遂げたことを喜び合った。

2 成果及び課題

朝の校舎のあちらこちらで「おはようございます。」と、大きな声が響くようになってきた。ともすれば、見逃してしまう生活態度のゆるみを全職員で話し合い、歩調を合わせて指導してきた成果である。更により生活習慣を定着させるために、根気よく指導していきたいと考える。

生き物を育てたり、様々な体験活動を行ったりして、心と心がふれあう積極的な生徒指導を実践してきた。その結果、うるおいやあたたかみが増し、児童が生き生きとしてきた。今後も、児童が意欲をもって登校できる、規律とあたたかみのある学校を目指して、全校体制で取り組んでいきたい。

3 その他参考となる事項

特になし

心に響く道德教育をめざして

奈良市立伏見南小学校 中尾 三知子

1 実践内容

子どもたちは、それぞれによさや可能性を秘め、誰もがよりよく生きたいという願いを持っている。しかし、自分に自信をもてない子が多い。そんな子どもたちが、自分自身のよさに気づき、やればできるという自信や認められているという安心感をもって、生き生きと活動できるようになって欲しいと願っている。子どもたちは、いろいろな思いを抱きながら生活している。その思いを存分に出し合い、みんなで認め合うことができたらどんなにすばらしいことだろう。そのために、生き生きと語り合える道德の時間を大切にしたいと思う。「道德の時間は、何でも言えるから好き。」と話してくれた子どもの思いが、学級全員に広がることを願って取組を進めている。



(1) 楽しく生き生きと語り合う道德の時間を求めて

ア 子どもたちをよく見つめ、実態把握をする。

イ 楽しい学習になるように、資料提示を工夫をする。

ウ 子どもたちが自分の思いを表現する場や共に考える場を十分につくる。

役割演技を通して、登場人物に共感しながら楽しく学習する。

ワークシートに書くことにより、一人ひとりがじっくりと考えるようにする。

展開の後段で価値の一般化を図り、資料から離れて自分自身の生活を振り返り、自分の姿を素直に見つめられるようにする。

エ わかりやすく、心に残る板書を工夫をする。

オ 日頃から、友だちの意見に耳を傾ける子どもたちを育てる。

(2) 子どもたちの生活の様子や体験活動などに関連づけた資料を選ぶ

ア 「はしのうえのおおかみ」【小学校学習指導要領 第3章内容項目 低2 - (2) 以下同じ】入学して間もない子どもたちに、相手の気持ちを考え親切にすることは、相手も自分も気持ちよくなることに気付かせる。友だちとのかかわり方に戸惑っている子どもたちにとって、タイムリーな資料は、よい指針となるようだ。



「はしのうえのおおかみ」

役割演技

イ 「まどガラスと魚」【中1 - (5)】正直な心を育てたい子どもに、主人公の心の葛藤を話し合わせるにより、正直に行動することは、人との信頼を深めるだけでなく、自分自身が明るく生きていく上で大切であることに気づき、うそやかくしだてをせず正直に行動しようとする気持ちを育てる。

ウ 「おじいさんの安全旗」【高4 - (4)】

毎朝、交差点に立ってくださっている地域の人々の姿を通して、ボランティアについて考え、奉仕する喜びを知り、社会の役に立とうとする意欲を育てる。

エ 「鑑真和上」【高1 - (2)】

校区近くの唐招提寺を見学し、講話を聴きに行く体験活動の事前学習として取り組んだ。見学後、「マザ・テレサ」についても学び、いろいろな人の生き方を調べて「生き方発見」学習を進めた。これからの自分の生き方について考えるよいきっかけとなり、みんなで話し合えた。

(3) 家庭や地域社会と連携した道徳教育を進める

ア 生命の大切さを学ぶ学習では、出産間近な保護者をゲストティーチャーとして迎えた。家庭との連絡をとりながら、自分の誕生や小さい頃の様子を聞き取らせ、「たんじょう日」の授業の中で家の人からの手紙をプレゼントした。



「たんじょう日」の授業の様子

事前の連携した取組により、自分が生まれ大きく育ってきたのは、周りの人たちの支えや愛情によるものであることに気付き、感謝の気持ちをもちながら元気いっぱい生きていこうとする心情を育てることができた。

イ 道徳の時間の中で出た子どもたちの思いや考えを、学級通信などを通して保護者に知らせ、ともに子どもたちの心の成長を見守っていく。

ウ 体験活動などで、保護者や地域の方々の協力を得て、それぞれの役割を果たしながらともに活動する。一緒に活動することで、子どもたちの様子をよく知っていただき、会話も増え、ともに子どもたちの成長を喜び合い、温かく見守ることができた。

2 成果及び課題

道徳の時間は、自分の思いや考えを話したり書いたりすることが多い。間違いのない時間なので、意見を出し合う場を多くもち、それぞれの思いを認め合うことにより、子どもたちは、自分自身を素直に表現できるようになってきた。そして、『自分のよさ』や『友だちのよさ』を見つけることができたとき、自信をもち、明るさと元気を身に付け、友だち関係も円滑になるように思う。勿論、道徳の学習はすぐに成果の出るものではない。しかし、友だちの意見を聞いて自分にはなかった考え方に気付くことが、その子の心を揺さぶり、これから生きていく方向を見つけることに繋がると思う。

子どもたちの個性は豊かになり、さまざまな行動となって現れてきている。道徳の時間は、その行動を起こす元となる心に寄り添える時間である。私自身が、子どもたち一人ひとりの様子をよく見つめ、言葉がけを多くして、もっと子どもの心に寄り添い、それぞれの子どもよさに触れられるようになりたい。更に研修を深め、子どもたちとともに心に残る道徳の時間を作りあげていきたい。

3 その他参考となる事項

道徳副読本 どうとく 1年（光村図書） どうとく 2年（東京書籍）

道徳副読本 あすをみつめて 3年（日本文教出版）

道徳副読本 新しい道徳 6年（光文書院）

奈良県道徳実践活動学習教材 ひびき合う心 小学校高学年編（奈良県立教育研究所）

事例番号 9 小学校 総合的な学習の時間の部

地域の学習素材を生かした総合的な学習の創造 - 身近にある歴史に目を向け、調べたことを発信しよう -

天理市立柳本小学校 藤宗 慶

1 実践内容

柳本小学校では研究主題を「主体的・創造的な活動に取り組む子どもの育成」とし、地域や学校の特色を生かした総合的な学習に取り組んでいる。本校の東には緑あふれる龍王山があり、そこには大和川の源流である美しい清流が流れている。そのふもとには、古代の道「山の辺の道」が南北に通じ、周辺には数多くの古墳が点在している。また、本校の前には、三角縁神獣鏡が多く出土した黒塚古墳がある。このように本校区は、美しい自然と歴史が調和した町であり、総合的な学習を進めていく上での素材となるものがたくさんあるといえる。



子どもは地域で生き、地域で学び、地域で育つものである。しかし、最近の子どもたちは、自分の住む地域のことをよく知らない。地域には、その地域独自の歴史や伝統文化、行事などがあり、かけがえのない豊かな自然がある。それらを学ぶ場として、総合的な学習が担う役割は重要である。自分たちで学習テーマを決め、展開していく学習過程の中で地域にある文化財や歴史について学び、地域をより多面的に見る力を育てることができると考える。

このような点をふまえ、6年生の総合的な学習のテーマを「身近にある歴史に目を向け調べたことを発信しよう。」と設定し、地域の歴史について詳しく調べていくことにした。学習のねらいとして、歴史的な史跡を調査することで、その当時の歴史的背景に迫る力を育てる 工夫した番組を作成できる力を育てる 自分たちの住んでいる町の良さを再発見する、この3つを大きな目標とした。

まず1学期に、歴史ガイドブック作りを行った。この学習は国語科の「ガイドブックを作ろう。」と関連づけて進めた。柳本にある歴史的な史跡として子どもたちから出てきたのは、山の辺の道、黒塚古墳、長岳寺、龍王山城跡、柳本小学校、柳本飛行場跡の6つであった。自分の調べたい史跡を決めて、子どもたちを6つのグループに分けた。文献やインターネットを利用したり、現地に取材に行ったりして調査を進め、調べたことをグループごとに1冊のガイドブックにまとめた。ガイドブック作りでは、読者がわかりやすいように、写真や文字の色、大きさなどレイアウトを意識して作成した。

2学期には、ガイドブック作りで学んだことを活用して、柳本の歴史観光番組作りを行った。番組作りでは、「歴史街道」や「世界の車窓」など、プロの番組の構成を参考にしながら、わかりやすい番組になるように、脚本や絵コンテを全員で作成した。

次に、撮影するための役割(カメラマンやリポーター、音声など)を決めた。撮影計画を立ててリハーサルを何度も繰り返した後、実際に史跡のある現場で撮影を行った。撮影した映像の編集も子どもたちが行い、自分たち



歴史番組の撮影中の様子

の手で1つの番組を作り上げた。できあがった番組を視聴したときは、子どもたちから自然と大きな拍手がわき起こった。

3学期にはできあがった番組を校内放送で全校に発信した。視聴した全校児童からは「よくわかった。」「わたしたちもこんな番組を作りたい。」などの感想が寄せられた。この感想を読んだ子どもたちは、学習への達成感や喜びを更に感じとることができた。



歴史番組のワンシーン

2 成果及び課題

柳本にある様々な歴史的な史跡を最初にガイドブックにまとめ、そして歴史観光ビデオ作りへとつなげて学習していくスタイルは良かったと思う。ガイドブック作りが、番組作成の取材の部分にあたり、番組撮影にスムーズに入っていくことができた。その理由は、番組を作るにはより多くの知識理解が必要だからである。その意味からもガイドブック作りの学習の意味は大きかったと思う。

番組作りの良さは大きく3つあると考えている。1つ目は自分たちで作り上げた番組を視聴者の立場で振り返ることができる点である。製作者の立場から視聴者の立場へ容易に変わることができることが、この学習の最も有用な点であると言える。2つ目は、番組撮影で友だちと協力して作り上げていくことで、仲間作りができる点である。番組作りでのそれぞれの役割をお互いに理解し、協力していくことでグループに大きな一体感をもたせるができた。3つ目は番組を作り終えて、振り返ったときに大きな達成感をもつことができる点である。苦労して作りあげた番組だけに、視聴したときの感動や、達成感は大きいと思う。子どもの感想からも、この学習に対する大きな達成感を見てとることができた。

子どもたちはガイドブック作り、歴史観光番組作りを通して、地域にある様々な歴史を深く知ることができた。今までに何気なく見ていた地域の歴史に目を向けることで、自分たちの住んでいる町の良さを再発見できたのではないかと考える。この学習を通して、自分たちの町を更に好きになり、地域を大切に作る人間に育っていってくれることを期待している。

歴史番組作りの最も困難な点は、対象となる学習素材が、学校の外にある点である。取材や撮影には放課後の時間を使う必要があり、学習を進めていくのは容易ではなかった。安全面などを考え、取材や撮影には教師が付き添い、子どもの活動を支援した。今後、このような学習に効率よく取り組んでいくためには、地域の人々や保護者の協力もますます必要になってくるのではないかと考える。

3 その他参考となる事項

奥田 眞丈 監修 『「総合的な学習」の展開と技術』 教育開発研究所
総合的な学習実践研究会 編集 『総合的な学習の実践事例と解説』 第一法規
『総合的な学習を創る 総合的な学習で育てる学力とは』 明治図書
『総合的な学習を創る 教科と総合』 明治図書
佐野 金吾・小島 宏 編著 『新しい評価の実際』 ぎょうせい

1 実践内容

本校は、国際理解教育・環境教育・きこえの教育の3つを特色ある教育と位置付けている。その中でも、国際理解教育は、校区に興福寺や元興寺などの世界遺産を持ち、外国人観光客が多く訪れる地であり、また、16年前から奈良市が姉妹都市を結んでいるオーストラリアのキャンベラ市にあるエインズリー小学校と姉妹校提携をし、教員や児童の相互訪問をするなど積極的に交流していることから熱心に取り組んでいる。



エインズリー小学校も国際理解教育に熱心であり、日本語を学ぶクラスもあることから、今後も引き続き交流を進展させていくために、コミュニケーションツールとして、英語活動に取り組むことにした。

本校の英語活動は、週1回の実施で3年目を迎えるが、その運営方法については次の通りである。英語活動そのものをマネジメントする担当者（JTL）を置き、授業は担任（HRT）と日本人英語講師（JET）のTTで行う。JTLの役割は日程調整、内容等、JETとの打ち合わせやHRTとJETとの連絡調整である。

授業は、1年目は高学年のみで、総合的な学習の時間を使って週1回45分で行った。2年目は中学年でも行い、そして、3年目を迎える今年度は、低学年も発達段階を考慮して25分間行い、全学年で実施している。

授業を行うに当たって大事にしている点の一つは、小学校で英語学習を行うに当たっての根拠や意義を明らかにすることである。目標やねらいが学校として、しっかり定まっていないと地域や保護者の理解は得られない。このことについては、初年度から奈良教育大学英語講座の吉村助教授から実施上の留意点や授業内容について指導してもらっている。また、当大学英語講座の学生が本校児童対象に授業を行い、本校教員も授業参観し、研究協議を行っている。



英語低学年の活動

二つ目は、授業の実施上のことである。授業で大切にしているのは、HRTとJETのT.Tで授業を創造する。授業の中に、国際理解の内容を日本語で取り入れる。アジアの視点を大切にする。歌とゲームを多く取り入れ、児童にとって楽しいものにするの4点である。については、スピーカー役としてのJETと児童のことをよく理解しているHRTが一緒になって授業を展開してこそ、良い授業が創られると考えている。そういう点から、意思疎通がしやすい日本人英語講師（JET）とT.Tにしているのである。については、英語活動は、国際理解教育のコミュニケーションツールを高めるために行っているの、授業そのものは国際理解教育である点から日本語による国際理解の内容を取り入れている。例えば、国旗や貨幣、産物を知るコーナーなどである。については、本

校の国際理解教育で大事にしていることは、子どもたちにアジアの視点を意識させることである。「内なる国際化」という点で、アジアとの共生を重点にしていることもあり、英語活動でも取り上げる国々はアジアである。 については、チャンツやTPRなど体で覚えるように動きのある授業を工夫している。

三つ目は、活動の様子を地域や保護者に知らせることである。校区の中学校や小学校の先生に授業を見て頂き、連携の在り方を協議したり、学校視察や参観授業では積極的に授業をしたり、学校のホームページや学校だよりなどで授業の様子を紹介などして理解をしていただいた。

以上が、本校における英語活動の概略である。

2 成果と課題

児童は、英語活動の時間が待ち遠しくって仕方がないようである。英語活動の時間は、新しい言葉を知るだけでなく、それをゲーム化したり、体を動かしたり、競争したり、普段にはない活動であるからだと考える。それだけでも成果があるの



HRTとJETのTTでの授業はいうまでもないが、日本語とちがう言語にとまどいがなく、素直に受け入れられるようになったことも大きい。実際、英語であいさつもでき、簡単な聞き取りなら、なんら抵抗感もなくできるようになったことは週1回行っている英語活動の成果であろう。

英語活動を学校全体で週1回進めていくことは、運営面での苦労はある。しかし、今回、英語担当のマネージメント役と日本人英語講師を置いたことによって、担任との共通理解も得ることができ、大変スムーズに進めることができた。また、参観授業などで積極的に英語活動を行ったことから、保護者の理解も得ることができ、良い評価をいただくことができた。

今後の課題点は、まだ小学校での英語活動の意義や授業内容、学校体制など構築されていないので、実践を積み重ねながら、その在り方について具体的に解決する必要がある。そして、一番の問題点は中学校との連携である。あくまでも国際理解教育の一環として行う小学校の英語活動と教科教育としての中学校英語とは異なるのかもしれないが、同じ言語教育という点から無視できない問題である。本校は実施して3年目を迎えるが、やっと一つの結論を見いだした。それは、発音である。単語や構文の学習はいつの時期でも問題はないが、発音は初めて出会う時にしっかりやっておく必要がある。特に、低学年の早期英語では大切だと判断する。現在は、授業の中にフォニックスを多く取り入れ、口の動かし方など日本語で指導している。小学校で発音がしっかりできていることが中学校に進んでも決して忘れることがないものとなる。

今後、フォニックスを順次多く授業の中に取り入れ、正しい発音ができるような取組を研究していく所存である。

3 その他参考となる事項

本校のホームページ URL.<http://www.naracity.ed.jp/tsubai-e/>

1 実践内容

子どもたちの健康を害するものは身の回りに多く存在する。栄養の偏り、たばこ等有害なもの、生活の不規則さなど様々な要因が子どもたちの健康を蝕んでいる。子どもたちが自分たちの体と心を守っていくためには、有害な物を禁止するだけでは不十分である。正しい情報を伝え、自分の体は自分で守っていくことを自覚させることが大切なのであると考えた。



そこで、子どものからだと心を守っていくための手だてとして、次の三点に留意した。

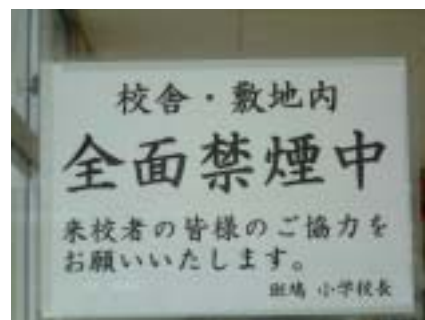
有害なものから子どもを守る。

子ども自身が自覚し、自分で自分を守る。

子どもだけでなく、保護者、地域に広げる。

私が保健主事となる以前から、たばこの健康に対する害が新聞テレビ等で大きく取り上げられていた。ところが、家庭の中では多くの家庭でたばこが不用意に子どもたちの目に触れるところに置かれているという現状がある。このようなことから、子どもが多くの時間を過ごす学校での喫煙について話し合いを繰り返し、分煙という形ではなく全面禁煙に取り組んだ。職員はもちろん外来者にも禁煙のお願いをし、敷地内全面禁煙を実施することができた。

たばこは学校では無縁（無煙）のものとなったが、家庭に帰るとすぐ手の届くところにあることも多く、興味本位から子どもが手を出してしまうことが懸念された。そのため、教師の指導だけでなく、保健センターの職員の方に専門的な話をしていただき、より深く心に訴えるという試みを行った。そこで、町の保健センターと連携を図り、6年生とその保護者を対象に「親と子の健康講座」としてたばこの害について学習を行った。



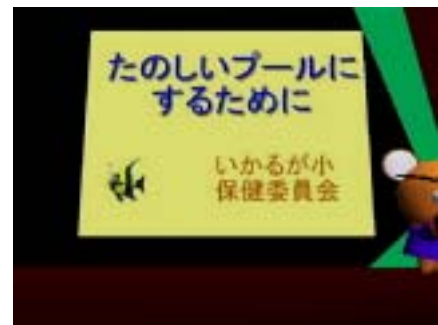
敷地内禁煙の表示

専門的な指導により、子どもたちは絶対たばこを吸わないという気持ちを強くしたようであった。また、保護者からも「とても良い勉強になりました。」という言葉が多くいただいた。子どもたちも家に帰り、おじいちゃんやお父さんにたばこの害について話し、量を減らしたりやめてもらったということも多く、子どもを通じて家で吸っておられる人たちにも学習したことを広めることができた。

保健委員会では、常時活動として保健室で待機したり、ポスター等を制作して、けがや病気にならないよう呼びかけたり、風邪の予防などを劇にして発表し、子どもたちに呼びかける活動を行っていた。しかし、発表が体育館のため、舞台上で声が聞こえにくかったり、当日休んだ子には伝わらないということもあり、ビデオ作りを考察した。ビデオ

オ化することで、各学級でも気軽に利用することが可能となった。教師の考えや児童の実態に応じることができ、利用の道は広がっている。

1学期は「楽しいプールにするために」と題して、プールに使用時の注意、2学期は「かぜをひかないために」という内容で、手洗いの仕方を中心に、3学期にはおやつと健康という内容で給食委員会と協同し制作した。制作をするにあたって、みんなにどんなことを伝えていくかを子どもたちに考えさせながら進めていった。長くなりすぎないように、簡潔にわかるように注意して制作し、保健委員会の発表として見てもらった。



制作ビデオ

また、保健委員の子どもたちとともに歯磨きの仕方のビデオを制作し、学級指導のための教材として利用している。

2 成果及び課題

たばこなどの害を正しく知り、自分で判断し、自分自身を守っていくという指導が実りつつあると確信している。また、自分の知っている身近なお兄ちゃんお姉ちゃんが出演しているビデオは、低学年の子どもたちにも好評でよく分かったようであった。このビデオは順次新しい登場人物、新しい指導など編集に変化をつけながら、一層新鮮でわかりやすいものになるよう児童と共に考え、工夫していきたいと思っている。このように、子どもたちの心や体を守る取組は、いろいろな人たちの協力があって初めて成り立つことを強く感じた。

教師だけで教え込むのではなく、栄養士や保健センターの職員の方、そして、医師等と連携して健康教育を推し進めていくことによって、より深く子どもたちの心に響く取組ができ、家庭にも広げていくことができた。そして、家庭と学校が連携をし、子どもを守るという立場で協力することによって、この取組はますますゆるぎないものとなってきた。

また、見たり聞いたりする知識だけではなく、子どもたちの体験を重視していくことで学習が定着し、まわりに広げる力となった。教師が子ども一人一人を大切にし、子ども自身が命の大切さを学んでいく日々の活動が大切だと感じた。

子どもを脅かす事象が多く起こっている現在、たばこだけでなく、児童虐待や不審者から子どもの命を守っていくのだという気持ちを教師は常に持たなければならない。そのために、教師は子どもの健康について常に気を配り、ちょっとした異常や変化を敏感にとらえる感性を持ち、専門機関と連絡を取っていくことが必要であると考えます。

そして、更に、この取組を充実させるために、様々な機関と連携を密にするとともに、綿密な計画を立てることが重要と考える。

3 その他参考となる事項

生駒郡斑鳩町立斑鳩小学校ホームページ

<http://www4.kcn.ne.jp/~ikarugac/>

生き生きと表現する子どもをめざして
～ふるさとに親しみ、地域の人々から学ぼう～

十津川村立西川第二小学校 内山 孝男

1 実践内容

(1) はじめに

本校は、現在奈良県最南端に位置するへき地校である。児童数は昭和44年4月の統合以来100名近くいた児童も年々減少の一途をたどり、本年度は全校児童8名で、1・2年、3・4年、5・6年の3複式学級で共に学んでいる。



児童は、学校行事や児童会活動など常に全員で活動することが多いので、みんなの前で自分の思いを元気よく発表する。その反面、少人数のために人間関係が固定されて活発な意見交流が少ない。また、主体的に判断し、行動しなければならない場面に出会うと誰かの指示を待つという受身の行動が多い。

そこで、「生きる力」を「生き生きと表現する力」として捉え、「表現する力」「学ぶ力」「ふれあう力」を研究の柱として、地域の自然や文化に目を向けて、地域素材を教材化しながら表現力の育成に取り組んできた。

(2) 研究内容

- ア 地域素材の教材化と人材の活用を図る。
- イ 基礎基本の定着を図り、関心意欲を高める学習指導のあり方を考える。
- ウ 児童の主体的活動を進めるための学習活動を展開する。
- エ 国際理解教育を進める。

(3) 実践例から

ア 総合的な学習の時間（3・4年生） テーマ「温泉博士になろう」

課題について地域の自然や環境、更に文化に目を向けて話し合わせた結果、校区にある温泉を調べることになった。1学期に十津川村の温泉について不思議に思うことや調べてみたいことを出し合い、分担して調べ、調べたことをクイズ形式にして全校集会で発表した。飲泉コーナーも設けて楽しく発表できた。

発表を終えて、児童の中から2学期には校区にある上湯温泉について、もっと詳しく調べ、校区外の人にもその良さを発信したいという意見が出された。

そこで、十津川村にある3つの温泉の年間入浴者数を調べながら、上湯温泉の泉質や効能さらに入浴者の声などを集めて、上湯温泉のよさを多くの人に知ってもらおう取組を3学期に向けて進めている。



飲泉コーナー

イ みんなのお話

「自分の思いを聞き手にはっきりと分かりやすく話す」「話を聞いて感想や質問を言うことができる」を目標にして、月3回月曜日の授業前に実施してお話を楽しんでいる。1年目の課題は、地域を見直し、地域のすばらしさを再発見してほしいという

願いを込めて、主に地域に話題を求めた。お話を続けてきて話題の選び方や相手に喜んで聞いてもらおうとする意識が出てきて、話の組み立てに工夫が見られるようになってきた。また、話を聞いた感想や質問にも広がりが出てきた。

ウ わかばタイム

毎週木曜日の授業前に、各学年の発表や漢字と計算問題の練習時間として利用している。特に、学年の発表として、生活科や総合的な学習の時間、さらに国語科や社会科で取り組んだものを発表している。各学年ともそれぞれ自分の関心や興味に応じて課題を見つけ、問題解決的な学習を通して意欲的な発表ができるようになってきた。



上湯温泉の発表

エ 集合学習

へき地教育の一環として、村内の平谷小学校と連携して集合学習を行っている。集合学習は、学期に1回を目標にしており、本年度は、1学期に二日間平谷小学校へ本校の児童が行き、それぞれの学年に入り学習を共にした。交流を続けてきて、両校の児童が協力して活動する姿や、自分の学校や地域の良さに気付く目が育ってきた。

オ 英語・英会話学習

平成15年度の2学期からALTの先生による英語の授業が始まった。昨年度は、ゲームや簡単な英会話が中心の授業が多かったので、本年度は文法や発音などの内容を少し増やしている。児童は、英語圏の国の文化に興味をもつようになり、簡単な文で会話し、質問することができるようになってきた。

2 成果及び課題

昨年度から研究テーマを「生き生きと表現する子どもを目指して」、サブテーマを「ふるさとに親しみ、地域の人々から学ぼう」として研究を進めてきた。その結果、地域素材を学習材として授業に取り入れることによって、児童の興味・関心・意欲が引き出せるようになり、自己を豊かに表現する力がついてきた。また、生活科や総合的な学習の時間を通して、体験的な学習や問題解決的な学習を重ねることによって、一人ひとりの思考力を高められるようになってきた。さらに、地域の人々とのふれあいから、ふるさとに親しみ、ふるさとの人々から学んでいこうとする態度や行動力が出てきて、ふるさとに誇りと自信がもてる児童が育ってきた。

課題としては、学習課題や問題点を自ら見つけ出し、追求していこうとする主体的な活動までは高まりきれていない。今後、地域学習の必要性に対する保護者や地域の人々の理解を図りながら、地域素材の取り入れ方や学習の仕方、発信の方法について工夫を重ねて、更なる表現力の育成に取り組んでいきたい。

3 その他参考となる事項

<参考文献>

- ・第53回全国へき地教育研究大会佐賀大会研究紀要（平成16年度）
- ・第33回十津川村へき地教育研究発表会研究紀要（平成16年度）
- ・第49回奈良県へき地教育研究大会 吉野西(十津川村)大会研究紀要（平成17年度）

1 実践内容

本校は、平成13年から3年間保健体育推進指定校として研究を重ねてきた。その成果として「目を輝かせて生き生きと体育学習に取り組む子どもたちの姿」が見られるようになった。この研究で培った力を他の教科に波及させたいという全教員の思いと子どもたちの実態を踏まえ、研究主任という立場で、平成16年度からの研修をすすめる。



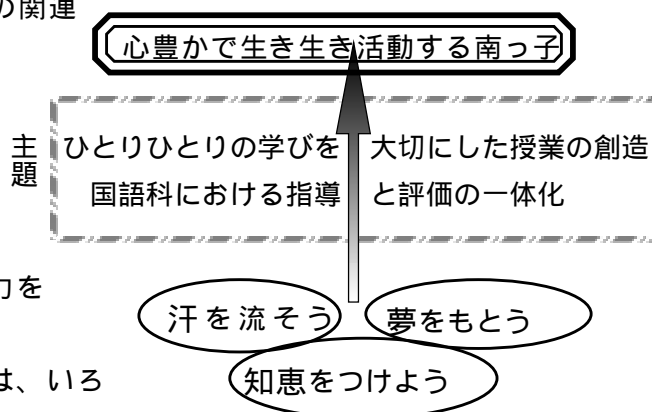
(1) 主題の設定について

ア 子どもたちの学習状況などの実態把握と外部評価の活用

平成16年度は教員による実態把握と学校運営におけるアンケートから研究主題を「ひとりひとりの学びを大切にしたい授業の創造 — 指導と評価の一体化 —」に、平成17年度は、保護者対象の外部評価も加わり、「学力低下が見られる。」が他の評価に比べ高めであったことから、学力を向上させる手だてを研修の中で取り上げる必要があることを認識した。また、教科を絞ることが学校全体として系統立てて研究できるという観点から、サブテーマに「国語科」をつけ足した。

イ 本校の学校経営方針及び目標との関連

研修を通し、学校が目指すところの児童像に近づくよう主題の中にも意識した内容があることも考える必要がある。



ウ 前年度とのつながり

前年度、取り組んできて付けた力を維持していくことも念頭におく。

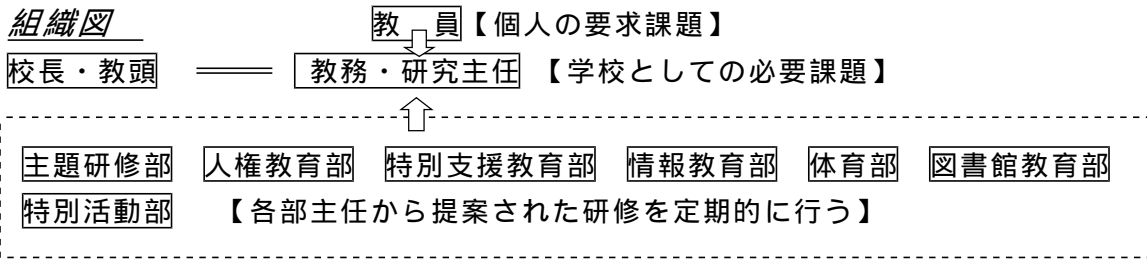
以上のことを考え、平成16年度は、いろいろな教科の学習の中で生き生きと活動する子どもたちの学びを評価しながら、どの子にも力を付けようと工夫してきた。平成17年度の研修は全ての学習の基礎基本であり、どの教科にも生かすことのできる国語科に絞って研究をすすめることにした。

(2) 研修推進組織

研修をすすめるには、組織作りが急務である。本校の研修組織は、小規模校のため、半数の教員が教育部のリーダーになっている。また、他の教員もいずれかの教育部に所属し、計画を立てる段階で率直に意見を言い、提案された研修には迅速に責任をもって取り組んでいる。また、少人数であることが功を奏している。

全体の研修は、毎週水曜の午後を充て、年度初めに年間計画を立てる。学期に一度は各教育部の研修ができるよう考慮する。現地研修などは、夏期休業中に入れた。

組織図



主題研修部として、全員年間一回研究授業（全体研修で行う研究授業が年間2回、その他は自主研修）を提案し、昨年度は、研究主任として真っ先に研究授業を行った。保健体育推進指定で経験した評価基準を入れた指導案を作成し、授業後の研究討議も評価に焦点を当てた。

(3) 研修のまとめ

研究の成果や課題を「研究集録」にまとめる。各教育部の主任によるもの、各自の研究授業についてまとめたものなどがあり、来年度の研修につなげていく。

まとめられた平成16年度の研修内容についての成果には、以下のような意見があった。

- ・ 全員が年1回研究授業を行ったのはよかった。必要であると思う。すごく勉強になった。
- ・ 研究授業などで講師として招いた指導主事の話 指導案の一部から最新の教育について知ることができてよかった。
- ・ いろいろな研修ができてよかった。

4. 単元の評価標準		
ア 目標への関心・意欲の増進	イ 学び態の	ウ 実践についての理解・理解の深まり
① 調べたことをまとめることで理解しようとするときに、興味を持って目標を眺めようとする。	② 他者の意見を尊重しながら、互いの意見を述べている。 ③ 他者の意見を、尊重を込めて受け止めている。 ④ 互いの意見を尊重しながら、互いの意見を述べている。	⑤ 単元の行先などをもとに、意欲的に取り組むことができる。 ⑥ 単元の行先などをもとに、意欲的に取り組むことができる。 ⑦ 単元の行先などをもとに、意欲的に取り組むことができる。
5. 指導と評価の計画（5/4時限）		
区 時限	学 習 活 動	評価の観点から見た評価
1	お話を聞いて読んでいて計画を立てよう。 - 読み聞かせをする。 - 自分から話し出す。 - 言葉をつくる言葉をしめよう。	「読む」の観点から見た評価 - 読む態度がよい。 - 一人ひとりが自分の考えを述べようとする。 - 自分から話し出す。 - 言葉をつくる言葉をしめよう。

2 成果及び課題

研修を進めるにあたって、本校の学校教育目標をかかげる校長と話合いをもったことで、全体に研修計画をスムーズにおろすことができた。日進月歩の教育現場で、教員は職責を遂行するために絶えず研究と修養につとめなければならない。（教育公務員特別法）。本校の教員のすべてが、こんな気持ちで教育にあたっている。過大評価ではなく、全員が研究授業をしたことが、その表れである。また、各部主任が中心になって研修計画を具体化していくことに協力的である。昨年一年間充実した研修が進められてきたのは、そんな教員の姿勢があるからである。教師集団・子ども・学校 管理職がよりよい関係であることも、研究主任としてうまく計画を実践していける要因だと思う。現在、子どもたちは運動場でよく遊び、自分なりに目的をもち意欲的に学習しており、学校教育目標は、ほぼ達成できていると実感している。

今後、私を含め各部主任が「ミドルリーダーとして学校運営にかかわっていきたい！」といった意欲を引き出すような研修を模索していきたいと考えている。

3 その他参考となる事項

平成16年度研究集録《本校作成》小学校ホ-ムペ-ジ<http://www1.kcn.ne.jp/~heguri-s/>

生徒たちの夢と希望を出発点とした学年経営について

川西町・三宅町式下中学校組合立式下中学校 中本 克広

1 実践内容

本校は、平成11年度に創立50周年を迎え、その節目の年に生徒会で決めた文化祭のテーマが、「輝け未来へ 夢と希望の式下中学校」であり、その後、本校はこの言葉を目標にしながら歩んできた。

私たちにとっても、地域にとっても、生徒一人一人の存在が、夢と希望そのものである。その大切な生徒たちが、自らの夢と希望の実現に向けて、一生懸命になれる学校をつくりたい。そして、彼らを導き、手助けできる教職員集団でありたいという願いのもと、本校の教育は進んできた。

ここでは、平成16年度卒業生との3年間を振り返って、学年経営の概要と生徒たちの様子的一端を紹介したい。

(1) 学年経営の基本方針

学年スローガン

汲み取ろう なかまの思い 固めよう 心のスクラム

ア すずらん学級の生徒たちを核とした、人の気持ちを大切にできるなかま集団づくりを推進する。

イ 役割と責任を果たすことによって、自己存在感、自己効力感を実感させる。

ウ 全ての生徒が夢と希望を持ち、学校生活の中で、自他を高め合う姿が見られる学年を目指す。

(2) 重点的に取り組んできたこと

ア なかま意識を強め、行事の成功に向け、一つにまとまれる学年集団をつくる。

イ 自己を見つめるとともに、社会について知り、進路に対する目的意識を持たせる。

(奈良市内の公的施設・企業見学 1年社会見学 δ 職場体験学習～「見つけよう可能性、開けよう未来への扉」をスローガンに実施～ 2年 δ 首都機能等についての学習及びテーブルマナー講習 3年修学旅行 δ 高校見学会・体験入学等 3年)

ウ 進路選択に対応しうる基礎学力の充実 全員の一步を目指して

漢字・計算・英単語を重点的にトレーニング(朝の10分間学習、サマースクール、放課後の基礎学習会、漢字検定受検対策勉強会、冬休み勉強会)

図書室との連携をはかりながらの読書奨励(朝読みタイム等)

エ 作文力及びコミュニケーション能力の向上



創立50周年記念
文化祭のテーマ

作文個別添削指導の実施 さまざまな機会の書く活動を通じて
学んだことをまとめて発表する力の育成（職場体験学習発表会 2年 δ 『輝け！未来のスペシャリスト講演会』 2年 δ 修学旅行のまとめ 3年 δ 面接練習会 3年）

(3) 大切にしてきたこと

- ア 生活の規律と授業の秩序を重んじ、夢と希望に向かって努力できる生徒を育てる。
- イ 生徒理解に努め、熱のある粘り強い指導により、生徒との信頼関係を強める。
 - ・日々のふれあい・二者懇談の機会を利用して（毎年10月）・教師間の情報交換
- ウ 家庭との連携をはかる。（P = 親とS = 学校の連携）
家庭訪問によって、こどものくらしの状況や親の願いを知る。
家庭に学校的価値を理解していただき、協力が得られるような信頼関係を築く。

2 成果及び課題

この学年の生徒たちの学校行事におけるまとまりには、めざましいものがあった。2年の時の文化祭学年合唱では、「時の旅人」の歌声を体育館いっぱいに響かせた。職場体験学習発表会やノーベル化学賞を受賞された野依良治博士をお招きしての『輝け！未来のスペシャリスト講演会』では、生徒会が中心となって、司会進行、質疑応答などの活動を行い、成功に大きく貢献した。その時の表情は、式下中学校の生徒としての誇りに輝き、博士と応答する姿から確かな将来性が感じられた。圧巻は、3年の時の体育大会。とりわけ、男子組立体操の演技は見事な出来映えで、退場騎馬の勇姿を女子生徒が拍手と笑顔で迎え、会場全体が一つになった感動があった。



組立体操退場騎馬の様子

「進路保障は同和教育の総和である。」と言われるが、そのことに全力を注いだ3年間でもあった。個々の生徒の状況やニーズに応じて、できる限り、学習の場所と機会を設定し、補充指導に力を入れてきた。3年夏休み中のサマースクール（5日間）や基礎学習会（5日間）では、計10日間でのべ269人の生徒が参加した。また、休業中も学習に利用できるように、校内の一室を開放し、学年体制で指導にあたった。

日常的には、「学校はきれいなところ」「学校はけじめのあるところ」「学校は安全なところ」という“式下3原則”を徹底し、生活の規律と授業での秩序の確立に努めた。生徒たちも、私たちの願いを受け止め、期待にこたえ、日々の学校生活に懸命に取り組んだ。そして、卒業式を立派にやりとげ、それぞれの夢と希望に向かって巣立っていった。彼らが残してくれたよいものを受け継ぎ、今後も、一つ一つの取組が、一人一人のかけがえのない進路（夢と希望）につながるよう、みんなで高まっていける学年づくりを進めていきたい。

3 その他参考となる事項

川西町三宅町式下中学校組合立式下中学校ホームページ <http://www.shikige-jh.ed.jp>

1 実践内容

- (1) 社会科における観点別学習状況の評価を行う場面や方法・手段・評価の資料を得るためには、十分な評価場面の数を確保する必要がある。評価の場面が多ければ多いほど、その評価は客観性をもつことになり信憑性を増すことにつながるからである。また、社会科の4観点をみる評価方法や手段を工夫・改善することで、評価が有効なものとなる。これらの点についてまとめたものの一例が、次の表である。



【様々な評価方法とその有効性】

評価法・手段	自己評価法	観察法	作品法	テスト法
観点				
社会的事象への関心・意欲・態度				
社会的な思考・判断				
資料活用の技能・表現				
社会的事象への知識・理解				

かなり有効 有効 やや有効性に欠ける

- (2) 重み付け - 観点における評価方法・手段の重み付け -

一つの観点について、複数の評価方法・手段のある場合、それぞれの特性に応じて、その評価結果に対する重み付けを事前に決めて評価を行った。単元の内容にもよるが、例えば、関心・意欲・態度を評価する場合、生徒の内面的な部分を探るため、生徒の発言だけでなく、ノートやプリントなどの記述から得られる評価結果に対する重み付けを、他の評価結果に比べて大きくするようにしている。

【ある単元の例】

社会的事象における関心・意欲・態度の観点における評価方法の重み付けの割合			
学習活動の観察	ノート、プリント	ペーパーテスト	合計
40%	40%	20%	100%

- (3) 観点別学習状況の評価Aの考え方と評価Cの生徒に対する手だて

社会科の教育内容は、内容知（社会事象に関する法則性・概念）と方法知（法則性・概念の探究方法）で、その比率は8：2であるといわれる。このような社会科の特性をふまえ、生徒の学習状況を量的だけでなく、質的、方法的にも捉える必要がある。それは多面的、多角的にみるということの意味する。このことから、観点別学習状況の評価については、評価規準に照らし、生徒の学習状況が、分析・理解のレベルや学習状況の多様性、学習内容や方法の習得度などの視点から、十分に満足できる状況の場合に評価をAとした。一方、努力を要する状況の場合には評価をCとした。なお、Cの生徒に対しては、生徒のつまづきについてその原因を考え、個々に応じた指導を行った。

さらに、指導方法や指導内容が適切であったかについても分析し、必要に応じて見

直した。

【Cと判断した生徒への指導の具体例】の一部

資料活用の技能・表現	地図や統計の見方を確認させ、資料の作成方法について具体例を示して作業をさせる。
------------	---

(4) ペーパーテストの工夫

ペーパーテストを工夫することは、生徒の学習の成果や指導の振り返りのチェックを行うという点で、大切なことである。特に、定期テストにおいて、知識・理解の問題に偏ることなく、4観点をふまえた問題を作成することは重要である。なぜならば、テストは点数化されて示されるので、学習の到達度を見るのに分かり易い上に、客観性が高いからである。しかし、社会科における関心・意欲・態度のペーパーテストは、その作成が比較的困難で、大きな課題の一つである。また、他の観点と組み合わせる形で作成されることが多い。

【関心・意欲・態度のテスト例】

問題：曾爾村に必要と思われる条例を考え示しなさい。また、その条例の設定理由を答えなさい。

この問題は、「思考・判断」と「関心・意欲・態度」の観点を組み合わせて作成したものである。曾爾村に必要な条例として、その内容と設定理由がきちんと述べられていればBとし、さらに現実問題として、その必要性が感じられ、曾爾村で受け入れられる可能性のあるものであればAとする。「関心・意欲・態度」については、この問題では日常性、生活性、価値認識、規範性などの態度をはかるものである。

2 成果及び課題

(1) 研究成果

社会科における評価について、一定の方向性や方法を示すことができた。特に、評価を行っていく過程で、様々な評価の方法における特徴と有効性の分析ができ、客観性の高い評価へ近づいていくことができた。

(2) 今後の課題

ア 4観点の重み付けについて

実践では、評価の方法・手段による重み付けを行ったが、4観点そのものの重み付けについての分析が課題として残った。

イ ポートフォリオ評価の積極的な導入の必要性

ポートフォリオは、生徒が学習してきた資料・記録などを集めたものである。つまり生徒の学習過程の記録であり、これを活用することの意義は大きいと考える。ポートフォリオから何をどのように評価するのかをきちんと整理し、社会科独自の活用方法を構築していく必要がある。

ウ ペーパーテストのさらなる工夫

4観点をふまえたテストの作成を行ったが、「関心・意欲・態度」に関わるテストを工夫していくことは、今後のテスト作成においても重要課題である。

3 その他参考となる事項

特になし

1 実践内容

22年前に大学を卒業して、初めて高校で講師として教職についた時、こんなことを感じた。卒業生が先輩教師を訪問してきたとき、ニコニコと楽しそうに在学中のことや世話になったことを話しているのを見て、その場に新卒の私が入り込めない雰囲気があり、大変うらやましく思った。自分も採用されたときは、その学校でどっしりと腰をすえ、根を生やして、子どもたちとの関係をしっかり作りたいと決意した。そして、2年間の講師を経験した後、採用されたのがこの大正中学校であった。



着任したのは、子どもたちの荒れにより、その3年前に学校が「休校措置」をし、再生に向けて歩みだした直後であった。そのときの先輩教師に言われたことは、とにかくまず「家庭訪問に行け。」「地域の中に入って行け。」であった。何もわからないまま、それこそ1年間1日も欠かさないで、家庭に足を運んだ子どもたちのことも覚えている。子どもたちに粘り強くかわり続けることで、子どもや保護者のことも少しずつではあるが理解でき、信頼関係を築いていくことができた。先輩教師は、新任の私たち自身が肌で感じることで何かを学ばせようと指導してくれたのだと思う。がむしゃらに実践する中で、校区の現状や本校の校区独特の特性もだんだんとわかっていった。

下記に示したのが本校教育の目標及び方針にもとづく実践課題6項目中、生活指導にかかわる4項目である。

- (1) 徹底して子どもを理解しよう。
- (2) 教師集団の一致した指導体制の確立をはかろう。
- (3) 一人一人の子どもの「荒れ」の原因追究につとめ、その克服にむけての取組を強化しよう。
- (4) 学校と家庭、地域と連携を密にして、子どもの24時間をしっかりと見ていこう。

これらの実践課題をもとに、長年にわたって学校や地域に根を生やしてやってきたつもりである。ここ数年は、教職員も大幅に入れ替わり、私も今まで担任として最前線でやってきたが、いわゆるベテランという層に入り、若い先生を引っ張っていく立場にもなってきた。新しく着任してきた先生たちには、自分が家庭訪問で見えてきた親の生きざまや、生徒一人一人の様々な「しんどさ」に出会い、その中から感じてきた「家のぬくもり」や「ほっとする」気持ちを味わってほしい、という思いから、家庭訪問の大切さをくりかえし伝えてきた。ある家のお父さんは、何度となく家庭訪問に行く内に、ぼつりぼつりと次のように語りかけてくれた。「先生、わしな、高校行ってへんね。中学校もろくすっぽ行かへんかったし勉強もせいへんだ。せやから卒業してから苦労したで。

どこもやとてくれへんかったしな。仕事もないし、そらしんどかったわ。せやからこの子だけは高校に行かしたいし、しんどい目させたくないしな。」また、あるお母ちゃんは「わたしな、小さいときに親、離婚して親に育てられてないね。だからこの子だけには不自由な目させたくないと思て、しっかり育てていこと思うねけど、子育てわからへんね。どないしたらええねやろ。」と親の思いを語ってくれた。そんな親の思いを聞き、共有しながら、子どもに対して正面からぶつかってもきた。子どもたちも3年間の中で確実に応えてもくれた。

しかし、近年、保護者や子どもたちの現状も少しずつ変化を見せ、今までどおりではいなくなり、信頼関係をつくるのに時間がかかるようにもなってきた。ただ、昨年度も今年度も、子どもたちの大きな「荒れ」「ゆれ」に対して教師集団が、家庭訪問を繰り返す中で、共通理解・共通実践に心掛け、一致団結し体を張って立ち向かっていった。その結果、時間はかかったが、3年間で子どもたちは、少しずつではあるが確実に成長して卒業していった。入学した当時、教師を敵のように思い反抗し、何も自分のことを語らなかった子どもたちが、修学旅行のクラスミーティングなどで、自分の将来の展望や思いを教師や他の生徒たちの前で素直に語れるようになったのである。また、学校で事象が起こったとき、1年生の時には「学校であったことは学校に任せる。言うこと聞かへんかったら警察にでも何でも言うてくれたらええやろ。」と学校に対して言っていた親が家庭訪問を我慢強く繰り返すうちに、3年生では「先生すまん。こいつのこと頼んどくわ。」と今まで人に頭を下げたことのなかった保護者が、頭を下げてくれるようにもなった。私は、今までやり続けてきた「家庭訪問をとおして地域に入り込み、徹底して子どもを理解する生活指導」という本校の方針が間違いないことを確信した。

2 成果及び課題

家庭訪問等をとおして地域に入り込み、徹底して子どもを理解することによって、特に、保護者から「先生のいうことは、間違いないから聞いとく」「先生に任しといたら大丈夫や」という言葉をかけてもらい、子どもや保護者への信頼関係を得ることができた。ただ、この大正中方式が定着することにより、保護者や子どもの間に甘えが生まれ、家庭訪問に来てくれるのが当たり前のように思っている保護者がいる現状も一部にはある。また、教師がすぐに手を差し伸べることで、子どもたちをいわゆる「ぬるま湯」の中で指導してきたのではないかという反省点もある。今一度、方針や実践課題について生徒、保護者、地域の現状を踏まえた上で再確認をし、教職員の一致した指導体制の構築が必要であると考えらる。

3 その他参考になる事項

特になし

地域の特性を生かした連携と生徒指導の在り方

五條市立五條中学校 上西 秀樹

1 実践内容

今日、経済の発展や科学技術の進歩は、物理的な豊かさを生む一方で、国際化の発展、情報化の問題、高齢化の問題などが進み、人々の人生観や価値観の多様化など著しい変化をもたらしている。このような状況の中で、経済的な格差の拡大などによる家庭崩壊や夜遅くまでの塾通いなどで、多くの中学生は、ストレスが蓄積し、それを発散したいと訴えているように感じられる。青少年の問題行動は、戦後第四のピークを迎えてると言われており、このような厳しい教育現場における生徒指導では、子どもの心に耳を傾け、子どもの立場に立った生徒理解に努め、心の通った指導の徹底と保護者等との信頼関係を構築することが、これから最も大切にしていかなければならない課題であると考えます。



本校は、平成9年4月に五條西中学校と分かれ、全校生徒300名足らずの小規模校である。農業や自営業をはじめ、共働きの家庭など、家庭環境も様々で、保護者の価値観も多様化してきている。

生徒は、昔ながらの素直さと純粋さを兼ね備えており、おおらかで、明るく、あいさつのできる生徒が多い。しかし、その反面、活気に欠け、何事においても意欲がない生徒も多くいるように感じる。数年前には、生徒指導が困難な生徒が多数いたが、現在は、先生方の危機感をもった真剣な取組のおかげで、徐々にではあるが少なくなってきた。しかし、逆に不登校生徒が増えつつあり、子どもたちは様々な形で、しんどさやストレスを内に秘めていると思われる。

昨年度一年間に、保護者の愛情不足と子どものわがままから、生活習慣が乱れ、問題行動や安易な行動にはしる生徒がいた。特に、家庭という形をなさない家族や親子関係のひずみに基づく性格のゆがみが、昨年度のはじめ頃に顕著に現れてきた。子どもが崩れていく最初の頃、保護者は何とかしなければならぬと考えて行動するが、そのうちにどうしていいのかわからなくなり、すぐにあきらめ、深く関わることを止めてしまう。その結果、学校における生徒指導は、子どもだけでなく保護者に対する指導も必要となってきた。また、家庭に問題がない生徒たちの中にも、急激な社会の変化や保護者の価値観の違いで、社会生活や集団生活を円滑に営む態度、またその基盤となる基本的な生活習慣等を十分に身に付けていない生徒も少なくはない。

こうした実態の中、担任一人だけで解決しようとするのではなく、学年の教師や生徒指導部、人権教育推進教員等がチームを組んで生徒理解や保護者理解をしながら、粘り強く取り組むことが大切であると考えます。また、学校のみならず、子どもにかかわってくれる地域の人たちや関係諸機関等の協力と支援そして、理解も欠かすことができない。目先だけにとらわれず、今後のことも視野に入れながら、人間としてどのように生きていくかを子どもに考えさせていく指導が、必要となる。以前とは違い、学級担任や個々の教員だけでは対応が困難になりつつある中、校内での生徒指導体制の確立は、重要であり、そのためにも様々な課題や問題を、できるかぎり学校内外でオープン化していくことで連携が密になるのではないかと考え、以下の取組を行った。

(1) 職員間の連携

- ・ 校内生徒指導委員会・・・ほうれんそう（報告・連絡・相談）の強化
- ・ 問題行動事象のオープン化・・・学年の事象でも学校全体の問題として認識

- ・家庭訪問の充実・・・複数の教員で行い、地域・家庭との連携
- ・部活動の活性化・・・信頼関係の向上と生徒の達成感・満足感の高揚

(2) 立哨指導

・登下校時に、あいさつ運動と言葉がけをし生徒に存在感を認識させるために、校門での立哨指導を行っている。その日の生徒たちの顔を見ることにより、ちょっとした変化を見つけることもある。また、遅刻指導や不審者対策にも有効である。

(3) 学校行事や地域の行事への参加

・積極性に欠ける生徒に対して、クラスの一員として自覚をもたせ、学校行事に参加させることにより、自我が目覚めるようになった。また、地域の行事にもできるだけ参加をするように呼びかけ活動することにより、確かな達成感や満足感を味わせるように心がけた。それと同時に教師もできるだけ地域に足を運び、一緒に参加するようにした。

(4) 保育所・幼稚園・小学校・中学校・高等学校と関係機関との連携

- ・保・幼・小・高との連携・・・月一回連絡会と必要に応じて学校訪問の実施
- ・市内の中学校との連携・・・月二回連絡会をもって情報交換の実施
- ・警察、青少年センターとの連携・・・月一回連絡会及び不定期であるが情報交換会の実施
- ・こども家庭相談センター、校区補導会等の連携・・・不定期であるが、協力と情報の共有
- ・地元地域との連携・・・商店街への訪問活動により、地域における生徒実態の把握

(5) 研修の充実

- ・校内研修・・・教職員の資質向上と共通理解
- ・PTAの研修・・・家庭教育の向上及び充実と家庭との連携

2 成果及び課題

問題行動のあった生徒の指導は、力量の有無にかかわらず、担任まかせなところがあり、問題を抱え込んでしまうところがあった。しかし、現在では小さな問題も全職員に報告（オープン化）し、他学年の問題も共有することで、学年間の連携が生まれ、チームで的確に素早く行動し指導ができた事例が多く、最後まで徹底した指導ができたのも大きな成果である。ただ、大きな問題に対しては、タイミングよく迅速かつ的確に指導できる体制には至らないこともあったが、職員はどのような問題に対しても危機感を感じ、組織として考えて行動しなければならないという生徒指導の方向性が見えてきたのではないかと思う。

本校の生徒指導の中核となる「ほう・れん・そう」の充実を図るためにも、校内生徒指導委員会を情報交換や問題提起の場として活用するとともに、養護教諭やスクールカウンセラーとの連携も深めていかなければならないと考える。生徒指導に欠かせないと言われている関係機関との連携で、大きな事件に至らなかったことが大きな収穫であった。

今後の課題として、最近の問題行動は、凶悪化・粗暴化とともに、これまでの行動や態度からは、周囲が非行を予見しがたいような子どもが大きな問題行動を起こしたりしている。このことから、学校においては、校長を中心に全職員が一致協力して問題行動に応じて適切な対応を図っていくなど、生徒指導体制を一層充実するとともに、保護者や関係機関と連携を密にして、生徒の発達段階に応じて、適切に対応する必要があると考えられる。更に、生徒指導を行う中での部活動は、大きな役割を果たしている。しかし、指導者不足に悩む時期に入ってきている。小規模校の職員構成と多忙な勤務の中、時には休日に指導してもらうことが多い現状である。また、命の大切さや物事の善悪の区別など、人間としての基本的な倫理観や規範意識などを生徒にしっかりと身に付けさせるために、生活体験や自然体験などを推進する必要があるのではないだろうか考える。

3 その他参考となる事項

特になし

1 実践内容

本校においては現学習指導要領が完全実施された平成14年度より、「生きる力」の育成を目指して、「調べる、まとめる、発表する」と題した調べ学習の時間を「総合的な学習の時間」に位置づけ、週1時間、1年生を対象に設けて取り組んできた。この調べ学習の時間の実践成果について述べたい。



まず、年間指導計画を立案した。生徒は小学校の時から様々な場面で調べ学習を行っているが、それらの多くは、調べるテーマが与えられたものであり、グループでの調べ学習が基本となっていたようであった。そこで私は、各自が興味のある事柄をテーマに選ぶことで、自分が主体となって調べ学習を進めるように考えた。また、調べ方については、「読んで調べる、聞いて調べる、自分の目で確かめる。」の多様な調べ方ができるように計画し、発表の力量を高めることにも目を向けた。このような考えを基本に年間指導計画を立て、第1次の4時間は、コンピュータ操作の習熟と、テーマの決定、第2次の6時間では、3つの調べ方を理解し、調べ方の計画や調べたことなどの発表、第3次の4時間では、手書きによるレポート作成、第4次は、4時間の学級内発表と2時間の学級代表による学年発表会、第5次は、新たなテーマで調べ、コンピュータによるレポートを作成した。

次に、生徒の調べ作業に私がどう関わったのか、について述べたい。第2次では、発表に対してアドバイスをを行い、調べがより深まるように企図した。近くの交番に行き話を聞いてきた生徒、市内の複数のコンビニやスーパーを回って、設置してある募金箱の種類を調べた生徒、動物園に行き数種類の動物の寝姿を写真に収めてきた生徒、ハムスターの生態について本で調べた後、実際に実験を行って検証し、そこから新たに生まれた疑問を専門家に聞きに行った生徒、インターネットのメールで質問をして専門家の意見を聞いた生徒、ホームページで調べた住所に質問の手紙を送って丁寧な回答をもらった生徒など、予想以上に行動的で興味深い調べ学習を行った生徒が現れた。

発表に関しても十分満足のいく状況であった。学級代表を1名に絞るのが難しく、私が代表枠以外に2名を選出した。学年発表会での発表者は7名となったが、7名とも学級発表会以降練習を重ねて、学年発表時にはさらにすばらしい発表を行った。また、発表を聞く生徒もしっかりと感想を書いていた。学級内発表の感想を各自が校内ネットワークのメール送信により発表者に送ったので、学級のみならず、自分の発表に対する感想を受け取る事ができた。



2 成果及び課題

レポート例(動物の寝姿)

学年発表会が終わった後、アンケート調査を行った。この調査結果や生徒作成のレポート、発表会での感想などから、いくつかの事実が明らかになった。まず、生徒の知的な好奇心が旺盛であるという点である。自分が調べることこそであるが、他の生徒の発表からも多くのことを学ぼうとする姿勢があった。「知らないことがわかると嬉しい。」との意見も多くあった。次に、自分の調べたことや考えを発表し、自分をわかってもらうことを強く望んでいるという点である。発表自体は緊張するし、苦手だとする生徒が多いが、自分の調べたことを伝え評価をしてもらうことが、楽しいとする生徒が少なからずいた。一方、生徒には時間的余裕が少ないことも明らかとなった。調べに行きたいのだけれども部活動や習い事で調べに行けなかったらしい。これは長期休業中も同じである。その結果、調べることができなくて、毎週の授業を負担に感じるとの感想も聞かれた。調べるための時間確保が課題のひとつといえる。

私はこの実践を通じて、生徒は自己実現を果たそうとする気持ちを内在させながら、うまく発揮できないのだと感じた。このような生徒が自己実現を果たすために、指導者は幅広い知識と問題解決のためのさまざまな方策を持ち、時宜を得た指導及び助言を生徒に与える必要があることを痛感した。そして、生徒のやる気を引き出す学習が、基礎・基本の確かな定着に結びつき、ひいては「生きる力」の育成につながるものとの認識を新たにしました。



パソコンによる調べ学習のようす

3 その他参考となる事項

<参考文献>

中学校学習指導要領（平成10年12月）

学習指導要領の一部改訂について（通知）（平成15年12月26日）

教育課程審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）」（平成12年12月4日）

「総合的な学習の時間の授業と評価の工夫」

- 評価規準及び評価基準を介した指導の改善、自己学習力の向上及び外部への説明責任に向けて -

第一次報告書（平成15年3月 国立教育政策研究所）

第二次報告書（平成16年3月 国立教育政策研究所）

山崎哲男 指導・監修 「調べることからはじめよう」(文研出版)

第1巻 調べ方の計画を立てよう

第2巻 図書館やインターネットで調べよう

第3巻 人に話を聞いて調べよう

第4巻 自分の目で確かめよう

<本校ホームページ>

<http://www8.ocn.ne.jp/~kachu/>

「出会い」

- バレーボール部の指導を通して -

宇陀市立菟田野中学校 田川 倉義

1 実践内容

私が、母校である菟田野中学校に赴任したのは、23年前であった。人権教育が進んでいる中学校への転勤と言うことでどのような子どもたちと出会えるかと、期待と少々の不安を抱えてのスタートであった。赴任と同時に男子バレーボール部の監督をまかされた。どういう風にやっていくかを色々考えた末、部活動の指導を通して、自分なりの解放運動を実践してみることにした。



赴任した当時の菟田野中学には、以前に起こった校内暴力に全力で立ち向かい、学校を立て直した先輩の先生方が多おられた。一方生徒たちは元気のある子が少ないという感じであった。人権に対する思いや願いは、一人ひとりきちんともっているのだが、子どもらしい元気が欠けているようで、それがとても気にかかりました。そんな中で、「子どもたちに夢をもたせ、子どもたちが、人権学習を通して身につけたことを身近に感じ取って、強く生きれるようになって欲しい。」と願った。

菟田野中学男子バレーボール部の名前が日本中で知ってもらえるようになったが、部員の中には色々な生徒がいた。私が一番印象に残っているのは、赴任して3年目のチームのメンバーである。全国大会ベスト8の成績を残した先輩のボール拾いを一生懸命やっていた子どもたちだ。彼らは先輩のために裏方の仕事をするので、自分たちが練習する時間がほとんどなかった。そこで、自分たちの練習する時間を作り出すため、朝の5時から学校に来てグラウンドを走り、授業の合間にはバレーボールをいとおしそうにさわり、家に帰ってからもトレーニングのために走るといった具合に、バレーボールが好きでたまらないことを、体全身で言っているような子どもたちであった。バレーボールが好きなことは誰にも負けないのだが、運動能力は低く、身長も低く、体力もなく、どの部活動でも通用しないので、仕方なくバレーボール部にいるというような感じであった。しかし、彼らはこつこつ努力をすることで、ゆっくであるが、実力をつけていった。

メンバーの中に、ジャンプ力のない子がいた。彼はジャンプ力をつけるため、毎日毎日近くの神社の階段を登り、縄跳びを続けることで、アタック、ブロック、レシーブが出来るようになった。また、チームメイトの一人が、家の仕事の手伝いの為、早朝練習に参加できないとなると、私の知らない間に残りのメンバー全員で彼の家の仕事を手伝い、何とかその子が練習に参加できるように助け合った。すべてがこのような状況であったので、選手は徐々にチームワークを固め、人と人との信頼関係を築いていった。そしてついにはバレーボールでも結果を出せるようになった。奈良県大会で2位を勝ち取り、近畿大会に出場、そして、全国大会に出場できる5チームの中に残ることも出来た。

そんな中、子どもたちの活躍を目の当たりにした親たちの姿が変わってきた。子ども

たちのひたむきな生き方が、日々の生活もままならなかった親たちの生き方を変えていったのである。バレーボールをするためのトレーニングウェアやシューズですら穴のあいたものを使い、それでもバレーボールをしていることが幸せでたまらないというほどバレー



2004年全国大会横断幕

ボールを愛していた子どもたちであった。そのなかまを信じ、努力し続けることの大切さを、自ら示してくれた子どもたちのおかげで、念願の全国大会に出場できた。菟田野中学校のバレーボールの根源は、この子どもたちのバレーボールだと信じている。身長も体力的にも恵まれず、これといった能力も技術もなかった子どもたちが、「バレーボールをやりたい。」「バレーボールが大好きだ。」という気持ちで努力し続け、結果を出してくれたのである。この子どもたちのおかげで、今日の菟田野中学校のバレーボールがあるのだと確信している。

これからもこの子どもたちが教えてくれた「努力すれば必ず夢がかなう。」ということバレーボールの指導を通して子どもたちに伝えていきたいと思っている。

2 成果及び課題

本校バレーボール部の戦績は、赴任2年目に全国大会ベスト8に入り、それ以来、今年度までに男子の部で13回全国大会に出場したということある。その中で平成元年、5年、6年に全国優勝をした。そして近畿大会では、春・夏合わせると16回優勝している。また、校外では、全国都道府県大会奈良チームの監督として、平成5年に優勝、平成6年に準優勝、平成10年に3位という結果を残すことができた。

菟田野中学校男子バレーボール部は上記のように素晴らしい戦績を残しているが、このような成果を残せたのは、素晴らしい子どもたちと出会い、その子どもたちから元気をもらい、そして、その子どもたちと共に夢を追う教師集団があったからこそ出来たことだと確信している。今後も子どもたちと共に歩む一人の人間として、頑張っていきたいと願っている。



2004年全国大会開会式

そして、そんな中で考えることは、いかに子どもに夢を持ち続けさせるかということにつきると考えている。昨今、過疎化が進み、生徒数が減少し、それぞれの子供たちがあまりにも各家庭において手をかけられ過ぎて、夢を持ってなくなっているように感じられる。そのような子どもたちを前にして、いかに集団スポーツを維持するか、そして、子どもたち同士の横のつながりをどのように強め、そして、チームとして一つの夢を追う集団をどのように作り上げるかということが、今後の課題ではないかと考える。

3 その他参考となる事項

特になし



1 実践内容

(1) はじめに

3年前より教務部で仕事をするようになったが、平成14年度から実施された学習指導用要領の定着、選択教科・少人数指導による学習スタイルの変換、指導要領改訂に伴う評価方法の改善など、教務主任として取り組まなければならない課題が多くあった。

(2) 学年教務部との連携

平成14年度以降の新指導要領の実施に伴い、教科時数の削減や時間割作成、「総合的な学習の時間」の取組、新しい評価方法の導入等、様々な課題について学年の教務部と連携をしながら、取組を進めてきた。

特に、指導要領の改訂に伴い、各教科時数の削減と選択教科の拡大、「総合的な学習の時間」の時間数との関わり、学年配置や教科担当のバランス、少人数指導と本校3年生で、実施している抽出促進指導との関係等、時間割作成上様々な要素が複雑に絡み合い時間割作成は困難を極めた。また、完成した時間割も、行事予定や出張等の関わりの中で、教科時間数確保のために「時間割変更」を行う必要がある。これらを学年の教務部に助けられ、毎月の行事予定を基に授業時数をカウントし、時間割変更・曜日の振替を行い授業時間数を確保している。

(3) 校種間連携や地域との連携、PTAをはじめ様々な方々の力を借りて

今まで、様々な分掌を担う中で、学校は様々な方々の力をお借りして成り立っていることを痛感した。前任校で同和教育推進教員をした時に、校種間の連携の中で、共に子どもたちを育むことの大切さを感じた。

このことから、本校で人権教育推進教員をした時にも、保育園、幼稚園、小学校との連携を図り、法切れ後の対応について取組を進めてきた。その中で鴨公小学校との連携の中『八木中校区人権フォーラム』を立ち上げることができた。その活動内容の1つに、地域での作業所や校種間連携を取り入れたボランティア活動を企画し、子どもたち同士のつながりを図った。中学生が園児と遊ぶ中で、自分達が幼い頃、どんな思いで育てられてきたか、また、共に取り組む中で、同じ学校の生徒との絆も深くなっていく。子どもたちは机の上ではなく、体験や経験を通して「人権意識」や「人間関係づくり」を拡げていくものである。

また、保護者やPTAの方々のバックアップ無くして、学校教育のスムーズな運営はあり得ないし、職場体験学習やゲストティーチャーの実施に当たっては、地域の協力無しに実施することは不可能である。その上、その活動を通じて、仕事に対する思いや生き方を学ぶことができる。活動を通して生徒自身が地域の人達とのつながりを実感する機会でもある。

また、本校では、卒業式前に「同窓会入会式」が行われ、同窓会長の話や『同窓会報』の配布などがある。生徒は、このような行事を通して、卒業生はじめ多くの方から、支援、協力をいただいているということを実感することができる。

(4) 総合的な学習の時間の組立

平成14年度の新指導要領の実施を前に、「人権・総合学習」を基本に据えた総合学習の取組を企画し実施した。

1年生では、「福祉体験学習」と「ゲストティーチャー」。2年生においては「韓国・朝鮮の文化に学ぶ」（講座学習）と「職場体験学習」。3年生では「進路ゲストティーチャー」を主な総合学習の柱とし、なかま学習の時間と連携しながら取組を進めている。大規模校ゆえ、学年のクラスを解体しての講座学習を実施するにはかなりの労力が必要とされるが、逆に大規模校の利点を生かしての様々な講座学習が実施でき、それを発表しあうことで、いろいろな取組を学ぶことができる。この取組の発表の機会を「人権集会」という形で実施している。



(5) 少人数指導と抽出促進

少人数指導においても、大規模校であるがゆえの課題も 人権集会でのサムルノリあり、一昨年に教員の複数配置が実現した。そこで、第1学年の全クラスで、数学科の完全少人数指導を実施することができ、生徒に充実した指導が行えるようになった。

また、本校では昭和53年より3年生の数学で“抽出促進指導”が実施されてきた。これまで数学が分からず「数学嫌い！」と言っていた生徒が、少人数できめ細やかな指導が受けられ、少しずつやる気を見せて、よい結果が出ている。この指導は、人権教育の取組の中で実現したものであるが、現在では、地区生徒に限らず、他の生徒にも参加を呼びかけ、拡大を図っている。

(6) 評価のあり方について

平成17年度より、評価・評定の表記をこれまで100点満点で行ってきた評価を5段階評価に改めるとともに、通知票を観点別学習状況を踏まえた表記に改めた。

新しい評価方法の導入に伴う、教科間における人数の格差等を今一度点検・確認し、評価のあり方についての話し合いを深めた。

また、今回の通知票の変更に伴い、各教科の授業の目標やあり方、各観点別評価の資料、そして、評価のポイント等を『各教科の授業と評価』という小冊子にまとめ、生徒に説明をすると共に、保護者にも冊子の配布を行った。

2 成果及び課題

平成16年度に行われた、「第1回特色ある教育課程を円滑に編成するための指導者の養成を目的とした研修」に参加する機会を得た。この研修は、全国一律に行われている教育課程から、各校が『特色ある教育課程』を開発し実施していこうというものであった。そのためには「学力の構造」をしっかりと捉え、自校の課題を明確にし、「目の前の子どもたちに今、どんな力を育てるべきか。」という学校課題を解決するための具体的な方法や施策の実施に取り組まねばならないというものであった。

これからの学校教育に求められるものは、「地域連携」と子ども達の「心を育てる」教育につきるのではないだろうか。いずれも「人間関係づくり」との関わりが深く、一人ひとりをつなぐ教育である。私は、現在の家庭教育や学校教育の中では、「個」の存在が重視されているが、「集団の中で“個”を生かす。」ことを重視するべきであると考ええる。

これらのことに対し教務という立場から、自校の教育課程のあり方や方向性を企画推進する原動力となりたい。

3 その他参考となる事項

特になし

1 実践内容

本校は、「総合的な学習の時間」や「選択教科」の取組を活発に行い、それぞれの学習の記録や成果を、冊子や映像、掲示物などできちんと残している。また、これらの学習の発表やまとめには積極的にコンピュータが利用され、生徒の情報活用能力の育成に役立っている。このような学習環境の中で、「学習情報センター」としての役割を果たす図書室をめざし、図書室が情報発信の拠点となり、生徒や教師の交流の場となるための実践を試みた。



(1) 学習情報センターとしての学校図書館に

「総合的な学習の時間」「選択教科」「必修教科」に積極的に資料を提供するための取組

ア 生徒の調べ学習や職員の資料の活用が円滑に行えるように「学習コーナー」「郷土の本コーナー」「人権学習コーナー」などを設けている。

イ パンフレットやリーフレット、新聞の切り抜き、生徒のレポート作品などをわかりやすく分類し提示している。

ウ 新着図書や話題の図書などはできるだけ平面に置くなどの配架の工夫をするとともに、たえず蔵書を点検し、生徒や職員の希望図書をできるだけ購入するようにしている。

エ 「総合的な学習の時間」「選択教科」「必修教科」で制作した作品やまとめを資料として展示し、次年度の学習に役立てている。また、学校行事の記録や文集なども毎年まとめ保存している。(資料展示棚に年度別に、各行事のパンフレット・しおり・文集を分類しているので本校の歩みがよくわかり、生徒にも好評である。)

オ 学校行事や美術の作品などの映像をデジタル編集して保存している。(コンピュータ委員会の職員の協力を得て、年度毎にまとめる。)

カ 図書室の環境整備をする。季節ごとの飾りつけ、案内板やしおり作りなどを行い、図書室への興味や関心を広げている。(図書委員会の活動による。)

キ 道徳や選択教科の学習などで積極的に図書室が利用できるように、資料の提供や関連図書の購入などを行っている。

(2) 図書室を情報発信の拠点に

生徒一人ひとりの情報選択能力・活用能力を育てるとともに、コミュニケーション作りをする取組

ア 朝の読書の効果で、読書を好む生徒が増える反面、偏った読書傾向も見られた。そこで、「推薦図書一覧表」を作り、生徒・職員に配布した。この一覧表は、「先生のお薦めの本」「生きること・命について考える本」などの項目ごとに分類した図書のリストで、

NO	著者名	書名	発行所	定価	◎
◎ 多くの人に読まれたい本から					
会1	くどう 右衛門	めくらうた 111集	集英社	911	
会2	くどう 右衛門	絵本めくらうた	集英社	911	
会3	矢野 龍渓	わだいなぐさのぼた 金子みすゞ	JILLIA	911	
会4	香 万寿	サクラ咲き	文芸春秋	911	
会5	石井 輝夫	母本図集	信友社	911	
◎ 二十歳の魂					
会1	藤野 京	二十歳の魂	集英社	911	
会2	新田 謙三	坊っちゃん	金の星社	911	
会3	ダン・ラフズター	あんながけにさん	信友社	911	
会4	ロ・ヘンリー	ロ・ヘンリー 10歳	新集社	911	
会5	サン・トウジヤリ	聖の王子さま	文芸春秋	911	

推薦図書一覧表

生徒たちが本を選ぶときの手引書の役割を果たしている。

今年は、約100冊の本を紹介した。昨年度との違いは、生徒たちの薦める本を加えたことである。また、読んだ本をチェックし、学年末に提出させている。

イ 「図書室便り」を通して、図書に関する情報や新着図書の紹介をしている。また、「校内読書感想文コンクール」「愛のメッセージコンクール」「本の標語コンクール」などの催しをすることにより、本や図書室に対する興味や関心を高めさせるようにしている。生徒の作品は文集にしたり、掲示したりして積極的に紹介している。

ウ 図書室を紹介するホームページを作り、図書室での学習方法や資料の利用方法を知らせている。

エ ブックトークや読み聞かせなどで、いろいろなジャンルの図書を紹介している。

オ 図書室が生徒や職員の交流の場になるよう、環境整備や情報提供に心がけている。

2 成果及び課題

図書室を積極的に活用してもらうための取組を始めて、図書室に関心をもつ生徒や職員が増えてきた。昼休みに必ず図書室に足を運んでくれる職員や生徒もいる。生徒と教師の交流の場として図書室が利用されているのはうれしいことだ。また、よい本を選ぶ能力が養われ、授業などで紹介した本が、リレーのように次から次



調べ学習の様子

へ読まれるようになってきた。生徒同士で本に対する

情報交換も積極的に行われているようだ。道徳や学活などに図書室の資料を利用してくれる機会も増え、朝の読書に読み聞かせなども取り入れられるようになった。特に、本年度は「豊かな心を育てるための取組」の一つとして図書室の活用が挙げられ、全校体制で心を豊かに育てる読書活動の推進が行われている。図書の整理や資料の整備、模様替えにも多くの職員が協力してくれる。

少規模校のため、生徒の考え方が一方的になったり、画一化したりすることが多かったが、生徒の作品が資料として展示されたり、文集として発表されたりすることによって、学年を超えたコミュニケーションが生まれ、異学年間の交流も見られるようになった。

最後に、図書室を変えるには、校内の協力体制が不可欠であると痛感している。積極的に資料や作品を提供してくれる職員、図書の希望を申し出してくれる職員、ぜひ生徒たちに読ませたいと本を買ってきてくれる職員などに支えられて、図書室は学習の拠点となりつつある。今後は、コンピュータ委員会の職員の協力により、検索システムを作り上げ、図書室のメディアを充実させたいと考えている。

3 その他参考となる事項

- <参考文献> 学校図書館メディアの構成とその組織化 (青弓社発行)
学校図書館のための視聴覚資料の組織化 (学校図書館協議会)
学習に活かす情報ファイルの組織化 (学校図書館協議会)

1 実践内容

情報化、国際化、高齢化、少子化などに伴う社会の急激な変化に対応するため、各高校では様々な工夫をして特色化を図っている。北大和高校においては、学校の特色を出すために、入学時から文系か理系を選択させ、生徒の進路実現を図ってきた。現在、高校再編が進む中、富雄高校と北大和高校が統合され、平成17年度に奈良北高校が生まれた。奈良北高校においては、従来からある普通科に加えて理数科が新しく設置された。

本校理数科が目指す教育は以下のとおりである。

- (1) 21世紀をリードする人材や、科学技術を支える人材の育成。
- (2) 感性豊かで知・徳・体を兼ね備え、自主性・創造性に富む人材の育成。
- (3) 基礎学力の定着と難関大学への進学に必要な学力の育成。

そこで、基本的な考え方として、従来のように学年を単位とするのではなく、3年間を見通して、入学から2年生の夏期休業までを前期、以降を後期と分けて長期的な計画を立てた。前期は、生徒が自分自身の適性を見極め、将来像を描く期間で、学習面では基礎力をつける時期とし、後期は、生徒の夢を実現するための学力をつける時期とした。

この考え方をもとに、授業・ホームルームを展開している。特に、理解不足の生徒には、質問の時間と場所を設定し基礎学力の充実に努めている。また、数学では学習内容を見直し、体系的・系統的に学べるように工夫している。

さらに、理数科では土曜日と夏期休業中の8日間（7月20日～30日）に特別講座として50分3限で英語・数学・国語の講座を実施している。また、来年度は理数数学研究で習熟度別授業を実施する予定である。

理数科の独自行事としては、生徒が科学への興味・関心が高められるように、様々な体験行事を実施または予定している。

- (1) 理数科校外研修（10月6・7日、2コースで実施）

Aコース

1日目は京都大学で大学生と交流会をもち、大学の授業内容や、自己の適性の見つけ方、入試への心構えなどを学んだ。また、現在、大学院に在籍している北大和高校の卒業生に講話をもらった。

2日目は、岐阜県のサイエンスワールド（体験施設）において、燃料電池の実験、地震に関する実験、極低温の実験などを行った。



実験風景

Bコース

1日目は、大阪府立大学で、川口教授から微生物に関する講義を受けた後大学を見学した。

2日目は、和歌山県串本市の近畿大学水産研究所でクロマグロの養殖場を見学し、その後、瀧井教授から魚類の養殖の科学について講義を受けた。その後、田辺市天神崎に移動し、『天神崎の自然を大切に作る会』の玉井先生の指導でフィールドワークを行った。



養殖場の見学

実施後のアンケートでは実験・習については特に満足度が高く感想文をみても所期の目的を達したと思われる。また、すべての生徒が、記録・司会・まとめ等の役割を担い、帰校後に、レポート集を作成した。

(2) 数学特別講義（12月22日実施予定）

文部科学省後援の「その道の達人」派遣事業により、埼玉大学の岡部恒治教授を迎えて数学の楽しさ・美しさ・有用性などについて講義を受ける予定。

(3) 先端科学に関する特別講義（平成18年5月 2年生対象で実施予定）

奈良先端科学大学院大学から講師を招聘し、現代の科学に関する話題について講義を受ける予定。

(4) サイエンス・パートナーシップ・プログラム（平成18年度 2年生対象に実施予定）

奈良教育大学の協力により、最先端の科学に関する実験および講義を行う予定。

(5) 奈良北高校創立記念講演（10月1日）

全校生を対象に、宇宙飛行士の毛利衛氏を招き、「宇宙の地球人としての私たち」の演題で講演していただいた。

2 成果及び課題

平成16年度から理数科の目標・内容などに関して中学校等へ広報活動を行った。その結果、分割選抜・一般選抜とも高倍率で、本校理数科は広く県民に受け入れられたと思われる。しかしながら、理数科は今年度が1年目であり、真価を問われるのは3、4年後である。それまで一層の努力を傾注したい。また、公立学校でも、今後、取り組まなければならない課題の一つとして土曜日の有効活用がある。これに関して、本校も生徒の進路実現に向けた指導の充実を図っていかねばならない。今後、様々な課題が出てくると思われるが、生徒・保護者の意見を聞きながら教職員一同、力を合わせて理数科の発展を図りたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立奈良北高校メールアドレスshinro@kitayamato.ed.jp

1 実践内容

吉野高校は、開校当初より地域に根ざした教育をめざし、数々の技術者を送り出してきた。そしてこの流れは脈々と今も受け継がれている。そこで私たちは、吉野町商工会や吉野山観光協会主催の諸行事に生徒とともに参加し吉野の歴史や文化を共に学んできた。生徒とともに吉野町森林組合や林業指導事務所に出向き、吉野の林業についても共に学んだ。その中で、吉野高校が地域から求められているものを話し合っていく中で、それらを実践へと移していった。



(1) 植林ボランティア

平成10年の台風7号で被害を受けたところへの植林作業にアシスタントとして参加した。きっかけは、吉野森林組合の専務の坂本氏に吉野町の被害実態について調査協力をしてもらった時だった。坂本氏は、「これからの山は、同じ樹種の林ではなく森を創って行かなくてはだめなんだ。杉・桧の大国吉野では、並大抵のことじゃない。けれど、誰かが始めないと始まらないんだ」と熱く語られた。そこで、植林活動を積極的に行っているNPOの「地球と未来の環境基金」に協力してもらい、企業や一般からボランティアを募り、「森林(もり)の集いin吉野山」を立ち上げて活動を起こした。平成10年から3年、倒木を撤去してようやく再植林できるようにした。平成13年から3年がかりで約2000本の広葉樹を植林し、美しい広葉樹林へと生まれ変わろうとしている。

また、平成17年3月には吉野での大阪産業大学開学記念事業の植林に際し、本校の生徒が大学生に植林指導も行っている。

(2) 吉野山灯り事業

平成10年9月、「吉野発・木と景色からのものづくり」を合言葉に、町・商工会・森林組合が集い「木のある暮らし」、「新しい住環境」をデザインという観点から提案し、木材・製材品・割り箸・和紙などの元



吉野 山灯り

気を取り戻そうと「吉野 山灯り」が立ち上がった。内容は、吉野の素材を用いて照明器具を作る体験塾と出来映えを競うコンテスト展を組み合わせたものである。

第1回目の塾は、課題研究の生徒と一緒に参加し、製材組合の会議室で行われた。道具や場所の不便さを感じ、2回目以降は、木工工作機械の整った吉野高校林産加工室を開放して行うようにした。また、生徒・教員とも加工スタッフとして協力した。平成13年から小・中学校間連携の指定を受けたこともあり、吉野中学校に「Jr山灯り塾」「Jr山灯りコンテスト展」を総合的な学習の時間に取り入れていただいた。今年で4回目を迎え立派な作品が出品された。このJrの部は本校生徒がすべて計画から実行までを担当する形となっている。

(3) 桜の再生プロジェクト

吉野山観光協会の桜保勝会から、吉野山小学校の桜苗木生産の活動が統合により終わってしまったと聞いた。吉野山の桜の文化を守ってきたこのプロジェクトを私たちが代わってできないものかと思い、課題研究の生徒達と取り組んだ。

平成15年4月25日吉野山の如意輪寺近くの、シロヤマザクラのサクランボを集め、学校へ持ち帰り、水に浸して沈んだものをプランターに植えた。翌年の4月中旬に発芽しポットに植え替えた。また生長点培養にも取り組み、森林技術センターで、指導してもらい実施した。現在苗畑で育苗中である。また、今年の4月より教育企画課の「桜プロジェクト」にも協力している。



(4) 木製ハイブリッドカー「もっくん」の製作

平成16年4月より、本校と奈良県南部農林振興事務所、林業研究グループ連絡協議会、企業等が協力し、産官学一体となって、奈良県初の木製ハイブリッドカーの

木製ハイブリッドカー

製作に取り組み、平成17年3月31日に完成した。これは、シャーシと動力部以外は全て木で作られていて、屋根の上に搭載された太陽光パネルと後部に設置した木炭ガス発電装置の2つのシステムにより作られた電気をバッテリーにためて、モーターで走るハイブリッドカーである。サイズは全長：2,850mm、全幅：1,300mm、全高：1,810mm、車両重量：600kg（推定）のコンパクトな車で最高速度は、20km/h程度である。完成直後に出展したイベントで、公式愛称を募集したところ70種類の応募があり、協力団体等の方々に投票してもらった結果、「もっくん」と決まった。

製作は課題研究の時間を使って開始した。製作する際に協力いただいた、たくさんの団体等の団体名（企業名）を木のプレートにレーザーで焼き付け、車体に貼った。普及活動は、地元の幼稚園での試乗会、環境問題に関心のある団体のイベント、林研グループ関係のイベント、森林組合の総会等々いろいろなイベントに出展し、森林・林業に関して興味を持ってもらい、県産材の宣伝にもなった。7月19日には、愛・地球博にも出展し、奈良県の木を世界に向けて発信した1日でもあった。

2 成果及び課題

- ・これら地域と協力することにより、学校開放を通してコミュニケーションを図れるようになるとともに、地域の技術を取り入れることが出来るようになった。
- ・地域が吉野高校に何を求めているのかがわかるようになった。
- ・産官学が協力することで、「木製ハイブリッドカー製作」のような今まで出来なかった大きなプロジェクトにも取り組めるようになった。
- ・生徒達が何事にも自信を持って取り組むようになった。
- ・現在活動している生徒は、課題研究や農業クラブのプロジェクト班という一部の生徒達だが、将来は科全体で、失われつつある地域の里山の創造や吉野林業の復興に、ボランティアとして保護・保全活動に協力できる体制を整えていきたいと考えている。

3 その他参考となる事項 吉野高等学校ホームページ <http://www.yoshino-h.ed.jp/>

数学的な発想の向上を目指した実践について

「柔軟な思考力を伸ばす問題に取り組む」

奈良県立奈良高等学校 竹村 謙司

1 実践内容

数学は、その発想や考え方のよさを知ることによって、より生徒の感性に訴えることができ、生徒は興味を持って問題に取り組むことができる。そのため、数学的な発想や学力の向上を目的とした指導内容や実践方法について研究している。



本校での実践としては、授業の内容に対応した形で数学的に興味深い問題を提供し、数学的な発想の向上を図っている。オープンプロブレムの形式を取り、生徒は自由な発想で問題を考えている。そして、どの解答についてもその考え方のよさを発見させるという点に留意している。取り上げたテーマは以下の内容である。

トレミーの定理

平面幾何の内容であるトレミーの定理はシンプルかつ美しい定理であるが、その拡張版である不等式の証明を問題とした。さらに、この定理から導かれる三平方の定理や三角関数の加法定理についても考察した。

3次方程式の解の公式

複素数平面を用いて1の7乗根を考える際に、相反方程式や3次方程式の形が出てくる。この一般的解法を発見することをテーマとした。

サーベロニの問題

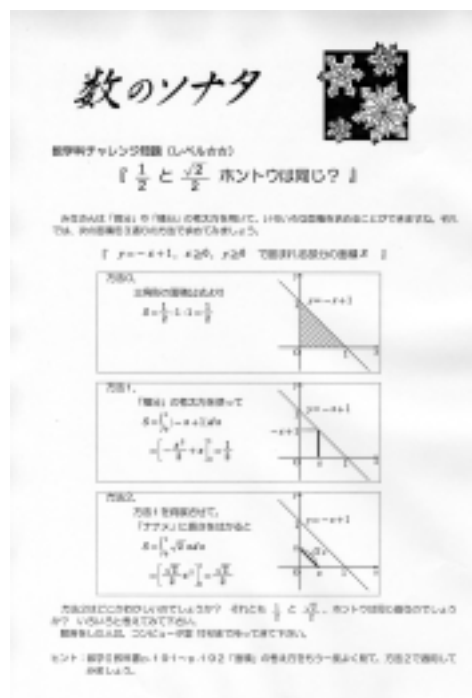
確率において、事象の表現を論理的にとらえることは大切である。そのことを考える問題としてサーベロニの問題を取り上げ、条件付き確率の考え方をを用いて考察した。

円の面積

小学校以来、円の面積は「 π × 半径の2乗」であることを知っているが、その厳密な証明を、古代ギリシャ時代からの考え方をを用いて発見していくことがテーマである。正多角形に内接および外接する円を考え、はさみうちの原理の考え方をを用いている。

局所座標と1次近似としての微分

積分の考え方をを用いて面積を求めることは、ややもすると機械的な計算になりがちである。面積の考え方の基本である「縦の長さ × 横の長さ」が、積分の考え方の根本であることを問題を通して理解



局所座標と1次近似としての微分

し、局所座標や1次近似の考え方を発見していくことが、テーマとなっている。

回転移動

図形の移動における最も基本的な変換である回転移動を、座標平面だけでなく、複素数平面や回転行列の考え方をを用いて考察する問題である。

空間における幾何図形

空間における幾何図形の考察は、ベクトルや空間座標を用いて考える方法もあれば、図形的なセンスを用いて、高校数学の学習内容を用いることなく考えることもできる。いろいろな角度から幾何的な考え方を検討してみた。

無限級数

極限の概念は、厳密な定義のもとに論理を展開しないと、思いもよらぬパラドキシカルな結論となることもある。ここでは無限級数の問題を考えることから、極限の概念についての考察をした。

カタラン数

多角形を対角線によって三角形に分割する問題からカタラン数とよばれる数列を考えることができる。この数を考えることにより、数列の漸化式や最短経路の問題等のテーマを考察した。

さらに、本校では文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクールの研究指定を受けている。これを受けて、大学での数学につながる興味深い内容をテーマにした講座を実施している。レベルの高い内容であるが、講義形式にすることなく、生徒の自由な発想や考え方を引き出すことに重点をおいている。また、コンピュータを利用した実習形式も取り入れ、生徒が自発的に問題を解決していけるよう留意している。取り上げたテーマは、複素写像、代数学の基本定理、円周率、テイラーの定理、オイラーの公式、双曲線関数である。

2 成果及び課題

数学的に興味深い問題への取り組みについては、多くの生徒が問題に取り組み、すばらしい発想で考察がなされていた。生徒は教科書から一步踏み込んで、数学の美しさや考え方のよさを理解することができた。数学的に興味深い内容をテーマにした講座についても、思いもよらぬ自由な発想で課題を解決し、自ら課題を発見していく姿が見られた。ここで見られた柔軟な思考力は、これからの学習における大きな力となるであろう。

今後は、数学的な発想や考え方を見ることのできる問題やテーマをさらに開発していくことが、最も大きな課題である。

3 その他参考となる事項

奈良県立奈良高等学校 E-mail : narahs@oak.ocn.ne.jp



回転移動

事例番号25 高等学校 教科教育の部

(主題) 郡山高等学校における家庭クラブ活動を通じた、高校生の地域参加と他人を思いやる心の育成について

- 行動に移し社会への貢献を目的とした活動 -

奈良県立郡山高等学校 仲田 千鶴

1 実践内容

本校家庭科では、高校生の地域参加と他人を思いやる心を育み、社会に貢献する態度の育成を目指し家庭クラブ活動を重視している。活動は授業を中心とした家庭科履修生徒(1年生全員と2年生文系生徒)全員が参加するものと、代表生徒が行うものがある。



(1) 家庭科の授業における取組

教科の一分野としての位置づけから、履修生徒全員が活動に参加させることが必要である。そのため、授業で作った作品を家庭クラブ活動に活用している。

具体的には、

1年生の1学期に、生徒ひとりひとりがステンシルで模様をつけた巾着袋を製作する。より良い作品づくりに意欲的に取り組ませるとともに、技術の向上及び家庭クラブ員としての自覚を持たせる。

2年生では、子どもの発達(保育分野)の学習の中で、世界の子どもを取り巻く現状を取り上げた後、授業時間を中心に5~6人のグループで布絵本を製作する。

これには、“安全であること、丈夫であること、楽しめること”を条件とし、製作の前に、前年度の作品を数点紹介し、受け取った子ども達の写真を見せることにより、生徒に製作意欲を持たせ、創意工夫のある個性あふれた作品を完成させる。

(2) 主な生徒の活動

交通安全運動協力

“運転は冷静に沈着に”との願いをこめてステンシル巾着を配布しながら交通安全を呼びかける活動(昨年度は運転中の携帯電話の使用禁止を呼びかける運動)を行ってきた。長年の活動を評価され、昨年は郡山警察より感謝状をいただいた。

海外の傷ついた子ども達へ布絵本プレゼント

2年生が作った布絵本の内、英語版については 絵本を見ているアフガニスタンの子ども達
平成14年よりJICAを通じてジンバブエに送ってきたが、本年度は、ラーラ会(JICAより紹介)を通してアフガニスタンの孤児院に送った。



3年間で1度の奉仕活動として、1年次に一人1回、早朝から昇降口前を清掃する活動をしている。この活動は、10年以上続いている。

日頃、お世話になっている警察署・消防署・郡山駅等に感謝の気持ちを込めて、手作りケーキを毎年持参している。この活動では、大人との対話を通し、生徒達の社会の一員としての自覚と責任ある行動への意識の定着につながっている。

『ひかり園(授産施設)』『郡山西保育園』との交流会

『ひかり園』との交流会では、1年生が作ったステンシル巾着と代表生徒が作ったマドレーヌを持参するとともに、ひかり園のクラブ活動に参加させていただいている。

『郡山西保育園』では、人形劇や子ども達とゲームをする。また、クリスマスプレゼントとして布絵本とステンシル巾着を持参している。これらの活動は、日頃、障害を持っている方や異世代との交流がほとんどない生徒達にとって刺激となっており、活動後は、他者を理解し、いたわろうとする態度が強く感じられる。

震災にあった新潟の子ども達にタペストリーの製作

中越地震で震災に遭われた方々の役に立ちたいという生徒からの申し出により、新潟の子ども達に義援金を送るとともに、被害にあった子ども達に早く元気になってもらおうとおもちゃとして遊べるタペストリーを製作した。これは、国際ソロプチミスト奈良 - 平城を通して長岡市の中沢しらゆり幼稚園に届けられた。

(3) 今後の活動に向けて

昨年度末に“国際ソロプチミスト奈良 - 平城”よりS(サービス)クラブに認定され、ボランティア活動に様々な面で協力いただけるようになり、さらに活動を推進できる条件ができた。また、校内においても長年積み重ねられてきたので、他教科の教員の積極的な協力が得られ、生徒の意欲の向上につながっている。

今後は、これまでの活動をさらに継続発展させるとともに、全国研究発表大会に向けて、地域に根ざした活動を充実させていきたい。

2 成果及び課題

家庭クラブ活動は、教科の一つの分野であるとともに生徒の自主性を重んじ、自ら考え実践する力が求められる。本校では、長年にわたり継続的に高校生の社会参加を意識した活動が展開されてきた。1年生は、裁縫が苦手でも受け取った人に喜んでほしいという一心から何度もほどこきながら納得いく巾着を作ろうとする。2年生の布絵本は、安全性を重視しながらも創造性豊かなもの、特に英語版については、経済的大国で生活する自分達の尺度で作った作品が相手に対する配慮に欠ける内容となっていないかなど、相手を気遣う心につながっている。また、家庭科を履修していない生徒が活動に参加を申し出るなど、地域に貢献できる活動に参加し、社会の一員としての役割を意識するきっかけになっているのではないかと思う。今後は、生活体験が乏しく、他者、特に異世代とのコミュニケーションがうまくできない生徒が増えている中、意識を高め、交流をはじめ様々な活動に積極的な参加意識を持たせる工夫がさらに必要である。



布絵本の製作

3 その他参考となる事項

平成17年1月27日 郡山警察署より感謝状授与

平成19年度全国高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会(愛知大会)スクールプロジェクトの発表に向けて『食育』を中心とした研究に取り組む。

事例番号26 高等学校 教科教育の部

(主題) 授業で学習した知識を伸ばす作品製作と全国への出展を通して

- 専門学科系クラブ活動をととした知識・技能・技術の伸長 -

奈良県立王寺工業高等学校 岡田 晋

1 実践内容

本校では、代々校長の旗振りのもとで『元気の出る学校』を目指して、いろんな分野でいろんな取り組みが行われている。私も、電子機械科の専門を教える教員の一人として、『日本一の工業高校』を目指して、専門科目を教える傍ら、メカトロ研究会部という専門学科系のクラブ活動を通して、授業で学習した内容を凝縮した作品の製作指導を行ってきた。この作品の製作を通して、各種工業材料の特性や加工理論・加工方法をはじめ、設計図のかき方やいろんな機構、各種センサーとアクチュエーター、電子回路とパソコンからの制御方法、Basicやマシン語、Visual Basic、C言語でのプログラミングなどの授業の深化はもちろんのこと、人生の切り拓き方や常に夢を持った生き方など、ものづくりを通じた人づくりを実践してきた。また、併せて学校の特色化と学校の知名度のアップにも、ほんの少しは役に立っていることと思う。



私は、5年間企業で機械の設計開発の仕事を経験した後この仕事に就いたが、最初の赴任先が前任校の奈良工業高校定時制であった。そこでは、当時も様々な問題を抱えながら何となく自信を持ってない生徒達が多かったように感じた。私は、そこで日々生徒達と共に葛藤する毎日だったが、その様な何年間を経て生徒達と自分達にもできるんだという夢と一緒に持とうとマイレッジマラソン(1リットルのガソリンで走行距離を競う競技会)に出場する省エネカーの製作に同僚達と取り組んだ。当時は、定時制高校では全国初の出場であったように覚えている。深夜や明け方まで生徒と一緒に製作することも多く、8年間毎年のように改良を重ね大会に出場した。同時に3台の出場を果たしたこともあった。その間、そんな姿を見てまた感じて、他の生徒達もだんだんと変容したように感じられた。長くこの競技会に出場していると、もっと上位の成績を取りたくなるもので、当時はまだどのチームも採用していなかった電子制御を取り入れた燃料噴射式に変えようと密かに勉強をしていた。現任校に転勤する直前には、ポケコンで機械語で作成した、夜間でも室内で出来る省エネカーの走行試験機を完成させていた。

現在の学校へ赴任後は、これらの経験と技術を活かして、次のような生徒に理解し易い手作りの実習装置の製作を行い、現在も授業で活用している。

水流の強さを任意にプログラムで設定可能なポケコンによる水位制御実習装置

各種センサを利用したトランジスタ実習装置

ステッピングモーターを利用した位置決めと原点復帰動作学習実習装置

その後、専門高校として学校の特色化を図れる作品を意識し、生徒にその技術を教えながら課題研究やクラブ活動を通して次の作品製作を指導した。

6 軸制御アームロボットの製作

Basic言語でPC制御。県産業教育フェアや王寺町文化祭出展。手首の水平維持（コップの水をこぼさず移動できる）、携帯電話のボイスメモリを搭載しロボットの状況により3種類の音声を発する喋るロボット。



アームロボット

「三番叟」の電子制御化

Basic言語でノートPC制御。県産業教育フェアや王寺町文化祭出展。パソコンからCDラジカセを制御し、音楽を再生させながら、音楽に合わせてプログラムによりモーターと11本のエアシリンダなどを制御することにより踊りを実演させた。第5回ロボットグランプリ競技会大道芸コンピュータ制御部門で伝統芸能賞受賞（日本機械学会主催）

「ドラムロボット」の製作

Visual Basic言語でノートPC制御。県産業教育フェア出展。パソコンに取り込んだ数種類の音楽を自動再生させながら、音楽に合わせて各種センサー信号で判断しながら、5個のギヤードモーター、4個の空気圧機器、3個のソレノイド、2個のフラッシュやLEDを利用して表情を変えたり、おもしろいパフォーマンスをしながら各種の楽器を演奏するロボット。第8回ロボットグランプリ競技会大道芸コンピュータ制御部門でロボット創造賞受賞（日本機械学会主催）。



ドラムロボット

2 成果及び課題

これまで私は、「こんなものが出来たらいいなあ。」「こんな作品を作ろう。作っているうちに何とかなるだろう。」と、その時点では自分では出来そうもないことばかりを言っは、生徒と一緒に夢を共有しながらいろんな作品を作ってきた。夢のようなことを語りながらも、生徒と書籍やインターネットで調べたり試作や実験をしたりすることを通して何とか実現してきた。作品製作を通して、技術的に不可能と思われた大きなハードルを越える毎に、生徒と共に大きな感動を覚えてきた。このような常に新しいことに挑戦する姿勢や、出来たときに得た感動や感激は、生徒の生き方にも大きな影響を与えているのではないかと考えている。この生徒達は、進路を選ぶ場合においても、選ぶと言うより高い理想をもって努力して切り拓いて行った生徒が多いように感じている。また、完成作品は一般の方や大学生が参加する大会等に出展しているので、生徒達のプレゼンテーション力の伸長や大きな自信にも結び付いているように思う。

生徒達は、ものづくりを通していろんな事を学び取っていくが、三年間という期間は短いもので、教えたことが数多くあるのに、ある程度のこと出来るようになったらすぐに卒業してしまう。昨今、我が国で問題になっている技術の伝承問題の縮小版が私の部でも存在し、下級生への効率的な伝承の方法をいつも模索している。

3 その他参考となる事項

学校のホームページアドレス

<http://www.oji-ths.ed.jp>

1 実践内容

教科「生物」等を通して、自然への理解を深めさせ、自然保護、環境保全、自然への探究心を養う指導を実践してきた。

十津川地域はへき地であり、面積が広く、地形が複雑なため、生物の詳細な調査はあまり行われてこなかった。私は、そのような地域の学校へ赴任し、10年以上に渡って、この地域の自然の特に生物について、生徒や地域の人々に紹介している。それには、十津川地域の生物調査に関して収集・蓄積したデータを利用しているが、これらのデータを学校教育や生涯学習に活用することで、社会へ貢献したいと考えている。



2 成果及び課題

ア 授業における生き物紹介

高校生物の授業で、ほぼ毎日、授業の初めの5～10分間に、生き物あるいは自然情報を紹介している。ビンのなかでヤマビルが動き回ることもあるし、朝死んだばかりの暖かいコジュケイであったり、校舎の廊下にいたイシガケチョウであったりする。また、ニホンカモシカとニホンジカの頭骨が教卓に並べられたり、日曜日に撮影した玉置山のアケボノツツジであったりする。生徒は、生き生きと眺め触り感じ、そして考える。

例えば、写真1は、十津川高校の近くで撮影した未だ名のない新種と考えられるミミズである。世界には未記載のまま絶滅の危機にさらされている生物が多いことを身近な生き物で教えたい。また、写真2は、電線上のニホンザルである。生徒にはタイワンザルとの雑種問題から遺伝子汚染を考えさせた。このように写真や実物を通して、生徒に感じさせたり考えさせるように工夫している。



名のないミミズ（写真1）



ニホンザル（写真2）

イ 吉野熊野学での取組

本校の総合的な学習の時間「吉野熊野学」では、地域を題材に様々なテーマに取り組んでいる。第1学年では吉野熊野地域全体について、第2学年では、歴史・文学・

福祉・自然の4分野から、それぞれ各自のテーマを設定して学習を進めている。私はその中の自然分野を担当し、「玉置山の森林調査」、「熊野参詣道小辺路を歩く」、「熊野川の自然環境調査」、「高校周辺の身近な植物」、「学校周辺の社寺林調査」、「十津川の鳥類」、「十津川の森林」などのテーマを扱ってきた。平成17年度は「十津川で拾った鳥の骨格標本づくり」というあらたなテーマに生徒とともに挑戦している。

ウ 総合理科において

高校総合理科の授業では、「ニホンオオカミと吉野」、「南方熊楠と紀伊半島」、「二津野ダム湖とオシドリ」、「大峯奥駈道と自然環境」、「クワ畑と明治・日本・十津川」などのテーマを扱ってきた。

エ フレンズネット

平成9～15年に行われた紀伊半島3県高等学校ネットワーク推進事業（愛称フレンズネット）では、自然分野を担当し、3県4高校の交流授業を意義あるものにしようと取り組んだ。

オ ガイドブック「十津川の自然案内」の作成

現在、十津川地域の中学校理科教員に呼びかけて、「十津川の自然案内」という本を執筆している。平成18年度に完成予定のこの本は、小学生・中学生・高校生が、地域の自然を理解する手助けとなるべく、生き物の写真を中心に、わかりやすい解説を心がけている。また、地域の人々・生活に関わり深い生き物の話の紹介や、地域での呼び名なども記している。児童生徒のみならず、生涯学習にも役立つものとして、大人までを対象としている。

カ 「十津川の自然」の発行とホームページ「十津川の自然」の作成と公開

不定期ではあるが、「十津川の自然（B4サイズが基本）」という補助教材を作成し、生徒に配布して、授業などで利用している。現在までに1～50号を発行した。内容は、日々の観察に基づく地域の生物情報であり、生徒のスケッチを載せたこともある。平成17年度から自分でホームページ「十津川の自然」を立ち上げたので発行は休止している。

ホームページ「十津川の自然」は、授業で紹介した画像と高校周辺で撮影した画像を中心に構成し、広く紹介するとともに、授業でも利用することがある。地域の特色を活かして、自然の材料を積極的に取り入れた授業を行うことで、生徒には地域を見つめ直し、生き物の生き様と人間について考えさせている。また、生涯学習の場面では、地域の方々と、情報交換を行いながら進めることで、地域との交流を図ることができた。これにより、環境保全の意識育成、高揚へとつながるよう期待している。

今後も、日々、野外調査を通じてデータ収集を積極的に行い、それらを学校教育や生涯学習の場で活用するつもりである。

3 その他参考となる事項

「フレンズネット」ホームページURL名<http://www.mie-c.ed.jp/friends/home/outline/out.html>

「十津川の自然」ホームページ URL名<http://www.geocities.jp/aogera55/index.html>

1 実践内容

基本方針・・・心のつながりを大切にする生徒指導
感動、達成感を与える生徒指導



(1) [日常の取組]

通学路点検・・・安全確保（実際に歩いて行う）

毎日の登下校指導（最寄駅、通学路、校門など）・・・挨拶などふれあいを重視する。

校内巡視（毎休み時間）・・・生徒との会話の場

生徒会活動の活性化・・・新入生との対面式、クラブ紹介、交通安全マスコット配布、各種壮行式、生徒総会、オープンキャンパス、体育大会、文化祭、3年生送る会、リーダー研修会などにおける司会進行や自主的な企画・運営。

部活動の活性化・・・競技力向上はもとより挨拶やマナーなどを重視する。



(2) [生徒を指導するうえで注意すること]

交通安全マスコット配布

生徒をよく観察、理解する・・・変化を見逃さないように気をつける。

生徒と一緒に活動する・・・言葉だけではなく、共に活動することで信頼関係を築く。

すべての生徒に声をかける・・・全校生徒と挨拶を交わすことを目標に活動する。

話をする時間を選ぶ・・・始業前に、昼休みに、放課後に、授業中に、などいつ話をすれば効果的なのかを判断する。

話をする場所を選ぶ・・・教室で、廊下で、職員室で、別の部屋で、家で、校外で、などどこで話をすればよいのかを判断する。

話をする状況を考える・・・みんなのいる所で、個人的に、電話で、メールで、などどういう状況であれば話しやすいのかを判断する。

声のかけ方を考える・・・放送で呼ぶか、他人にわからないように呼ぶか、など周囲の生徒との関わりを考えながら判断する。

日常の家庭訪問・・・問題が起きた時ではなく、普段から行うように心がける。保護者とコミュニケーションをとり、協力を得る。



遠泳実習

(3) [生徒に伝えたいこと]

周囲に気を配りながら自分も周囲の人も大切にすること。

ウソをついてごまかさない素直な心が大切であること。

過ちを認めることが信頼を得る第一歩であること。

人の批判をしたり、悪口を言うのではなく、人の良いところをみて自分を磨くことが大切であること。

何事も一生懸命にやれば結果がどうであっても感動できること。

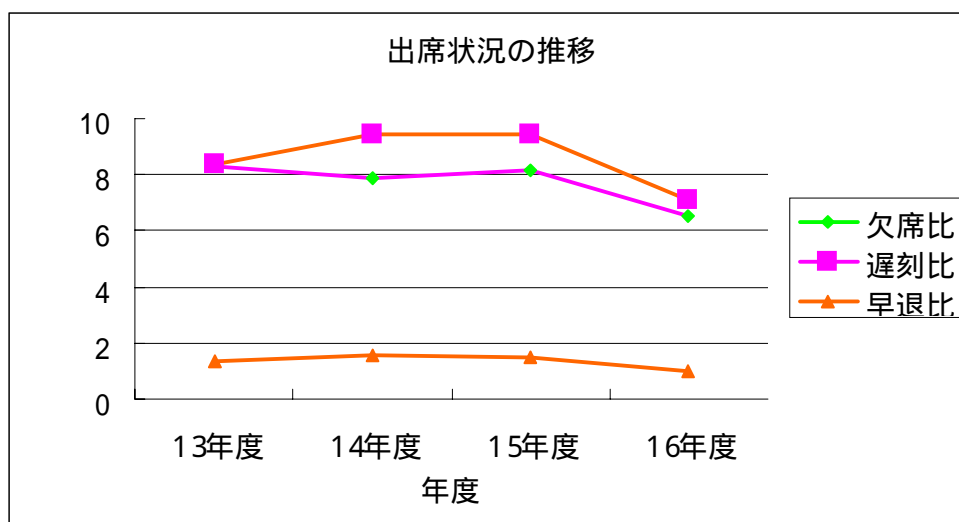
やればできること。

2 成果及び課題

挨拶励行や登下校指導に象徴されるように、日常の取組を重視し、担任を中心として全教職員が共通理解のもとに生徒指導にあたる体制づくりを進めてきた。

また、生徒に一方向的に押しつけて命令してやらせる指導ではなく、生徒自身が納得した上で、保護者や教職員の思いや願いを受け止め、自らが変容していく指導を心がけてきた。生徒を理解し、担任との連携を密にし、間違いを間違いとしてきちんと正し、高校生として、また一人の人間として、本来あるべき行動がとれるよう引き続き全力を傾注していきたい。以前も今も、生徒の数だけ感じ方があり、それぞれ受け止め方は異なる。教師はそれらに対応できるだけの豊かな感受性が必要とされる。そのためには教師自身が人間性を磨き、高めていくことが生徒を指導していくうえで最も大切ではないかと思う。今後もよりよい生徒指導ができるように研修を深めていきたい。

そして、全教職員の共通認識に基づく指導体制をより確かなものとし、生徒の指導・育成に邁進していきたいと考えている。



3 その他参考となる事項

奈良県立広陵・大和広陵高等学校ホームページ <http://www.koryo-hs.ed.jp>

1 実践内容

昭和58年4月、開校当初の片桐高校に赴任し、1年生の担任をした。新設校でこれから創り上げていく活気に満ちていた。入学後の個人面談で、クラスのT男は「毎日休まないで学校に来る」という個人目標を私に話してくれた。面談があつて間もなく、朝、母親に「しんどい」と言っていて登校しようとしなかつた。



母親は登校を勧めたが、「行かない。」「判っている。」と答えるだけだった。入学後の登校は8日間で、それ以降は欠席が続いた。教育相談（カウンセリング）との出会いは、T男との出会いから始まった。T男の家族は、父、母、大学生の兄の4人。小学校時代は成績が良く欠席もなかったが、友達と一緒に遊ぶことは少なかった。小学校3年の夏、大阪から奈良へ転居した。小学校6年の時、私立中学進学を目標に塾に通い努力していたが、入試に失敗し地元中学に進んだ。その頃より成績も下がり始め、口数も少なくなっていた。中学2年の時、部屋に隠れて登校しない日が数日あり、中学校3年時には20日程断続的に欠席し、母親が2回程病院に連れて行ったが、T男が嫌がり通院を中止した。

高校入学後のT男の欠席は長期化し、家庭訪問を続けたが、T男は一日中自室に閉じこもることが多くなり会えなかった。母親は「T男は精神的な病気では」と入院を強調され、かなり動揺する心の内を話された。母親とは定期的な面接を行い、母親の内面に渦巻く不安を受容するように心掛けるとともに、登校を強制せず見守る態度で接していくことの大切さを母親と考え合った。T男の生活リズムも一時は昼夜逆転し、家族を避け自室の窓はカーテンで閉ざし外界を遮断した。1年次は原級留置、その後、休学。その間母親との面接を続ける中で、徐々にT男を見つめる母親の姿も「小さな子供みたいです」と少しずつ変容し、T男自身も父や兄を避けることが少なくなり、自室に閉じこもる時間も短くなっていった。家庭訪問で、T男に会えない時はメモ書きを残すようにした。T男は2年間の休学後、「高校が嫌いとか、学校が厭という訳ではないけど、高校は辞めます。大学検定を受けて将来は理科系の大学を目指します。」と話し、退学していった。T男や母親と十分な関係を持てたのか、彼の自立のためにこれで良かったのか、という後悔ともつかない自戒の念と、自分の非力さ無力さを痛感した。

当時、HR担任として、生徒を理解するため研修等で学んだ心理テストやカウンセリングの技法を積極的に試みた。Y-Gテスト、バウム・テスト、箱庭療法、心理劇等々の実施、しかし、その中で気が付いたことは、理論や技法よりも生徒が見せる表情、動作などの「心のサイン」を注意深く感じ、読み取ることの大切さであった。

二階堂高校では、平成6年度から4年間学年主任として、個別指導・集団指導の中に教育相談的手法を取り入れる試みを行った。校内での教育相談体制の確立、担任者会での生徒の情報交換、事例研究、養護教諭・生徒指導部等との校内連携、また家庭との連絡、家族関係を深く理解するための積極的な家庭訪問の実施、生徒個々の事例の記録、

教育相談カードの活用、また必要に応じ専門機関との連携を行った。

「問題行動」は、親や教師を悩ませ、本人をも苦しめる「問題の生徒」というレッテルを貼られてしまう。しかし、「なぜ、そうしかできないのか、何があったのだろうか。」と、生徒の内面的な意味を理解しようとする、解決の手段も見えてくる。また、問題を早期に発見でき、適切な対応をすることも可能になる。学校における教育相談として心がけたことは、1対1の面接を行うだけでなく、休み時間の廊下での立ち話、清掃時等あらゆる学校場面での機会を利用した。

本校では、平成15年度入学生より始まった新教育課程の編成と実施に教務主任として関わった。従来を廃止し、2年次より選択科目を設定することにより、生徒が進路希望の実現と個性の伸長を図り、その特性を生かすため生徒が自由に選択できる教科、科目を設け、可能な限りその希望する講座を開設するよう編成した。教育相談の目指す「ひとりひとりの生徒の個性を伸長する。」「生徒自身の自己決定を尊重する。」ことの具現化である。平成15年6月に県立高校再編計画が発表され、上牧高校は再編統合されることに決定した。再編最終年度の年に一番心がけていることは、学校行事の活性化と生徒の積極的な活動である。今年度、1学期には愛知万博への宿泊研修、2学期には芸術鑑賞会（劇団四季）、「教育の日」講演会の実施。文化祭では、生徒全員でメッセージを書いた風船を飛ばし、その後職員や保護者を交えてのバーベキュー会を催す等の多彩な行事を行った。

上牧高校最後の文化祭

2 成果及び課題

教育相談の実践を通して、生徒の内面的な心の動きを理解するとともに、教師自身の行動を見直し、自分の在り方に気づくことが大切である。また、教育相談は万能な方法ではなく、問題行動に近づく一つの方法である。しかし、生徒の問題行動が表面的なレベルではなく、行動の背後に重要な意味が隠れていることを理解できるようになる。

情報化や国際化に伴い、社会の価値観が多様化する中で、生徒の意識・価値観等も多様化・複雑化し、情報等に惑わされ自己を見失いがちになっている。問題行動を示す生徒は、否定的な自己イメージを持っていることが多く、自分を大切にしている心がうまく育っていない。周りから肯定的な言葉をたくさん受け大事にされると、自分を大切にしている心と共に、他人を大切にしている心、思いやる心も育っていく。

今後、生徒の心の内面に注目し、カウンセリング・マインドを大切にしたい指導を深めていくことが、生徒の問題行動を未然に防ぎ解決する為に非常に重要であると思われる。

また、生徒を取り巻く環境は近年大きく変化し、生徒が未来に夢を持つことや「大人になること」が難しい現実と直面している。豊かな感性を持ち、「夢」を持ち、自己実現を達成できるような取組を行うことが、大きな課題である。

3 その他参考となる事項

奈良県立上牧高等学校ホームページ <http://www.kanmaki-h.ed.jp>

「総合的な学習の時間」の全体計画と運営

奈良県立奈良工業高等学校 鍵本 光弘

1 実践内容

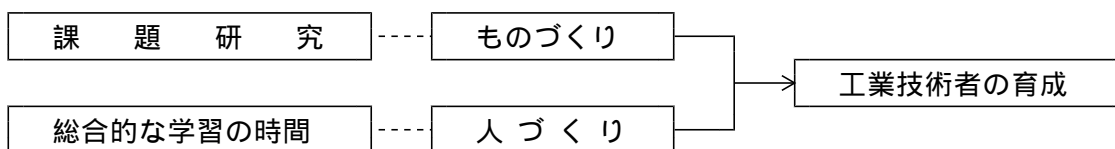
(1) 本校における「総合的な学習の時間」の全体計画

「総合的な学習の時間」の創設に向け、平成11年度から学校長の委嘱を受け、13名からなる新教育課程検討委員会が組織された。この委員会のメンバーには各教科から教科主任以外の者が選ばれ、「総合的な学習の時間」の取組について全く新しい発想で検討を進め、具体的な全体計画を作成した。



本校では既に第3学年で「課題研究」を履修しており、これを代替する形で、第3学年で「課題研究」(2単位) + 「総合的な学習の時間」(1単位)とし、「課題研究」をふくらませて、「総合的な学習の時間」ととらえることとした。既に履修している「課題研究」で「ものづくり」を、「総合的な学習の時間」で「人づくり」を担うものとしてとらえて、以下の目標を設定した。なお、「総合的な学習の時間」は、新しいことを始めるという意味合いをこめて「草創」と名付けた。

本校の教育目標は、ものづくりを担う工業技術者の育成にある。ここで、「ものづくり」は人がするものであって、人なしではものづくりはできない。「ものづくりは人づくり」そのものである。このものづくりの意義をふまえて、本校が取り組む「総合的な学習の時間」においては、「人づくり」の側面を担うものとしてとらえ、工業技術者としてのより視野の広い豊かな人間性をはぐくむことを目標とする。



(2) 「総合的な学習の時間」の組織的な運営

平成16年度の第3学年から「総合的な学習の時間」が実施されることになったが、運営にあたっては、不確定な部分があり、その都度、担当者会議を開催して検討することとした。本校では、「総合的な学習の時間」は地域や学校の特色に応じた課題とし、これを普通教科で担当するものとし、教員数を考慮して各教科で1～3のテーマを考え、計15テーマを設定した。学習にあたっては第3学年全体で、学級の枠をはずし、希望調査・調整のうえ、1テーマ15名前後で1年間を通して実施することとし、実施にあたっては、「課題研究」と切り離して考え、LHRがある曜日(水曜日)の第4限に設定した。この時間帯の第1、第2学年の授業は、すべて工業科で担当するよう時間割を編成した。

各テーマの指導内容については、担当する教科で、テーマごとに年間指導計画を作成し、担当者が替わっても対応できるように配慮した。

また、年度当初には各テーマごとの年間指導計画、評価の観点、評価法、履修者名簿等をまとめた「指導概要」を作成し、全教職員に周知した。なお、実施にあたっては、他の教科の年間指導計画と同様に、具体的な指導計画の作成を各担当者をお願いした。

(3) 「総合的な学習の時間」における評価

「総合的な学習の時間」については、各教科に先がけて、観点別学習状況の評価を行うこととした。「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現」を評価の観点として定め、各テーマの年間指導計画に合わせて、具体的な評価項目・内容を設定した。



各テーマの年間指導計画にもとづいて、前述の具体項目「大和の地誌と食文化」で調理実習に該当するものを拾い出して、表にまとめ、評価の内容を設定した。評価の観点の具体的な項目については、学習の進行状況によっては評価できない項目があり、学年末に文章記述による具体的な評価を実施し、各学期末については出席状況のみ通知票へ記載することとした。通知票については、第1・2学期は各教科の成績を記載した所定の通知票に出席状況（欠席時数）のみを記載し、学年末は各教科の成績を記載した所定の通知票とは別紙とし、年間を通じての評価を文章で記述することとした。

2 成果及び課題

「総合的な学習の時間」がスタートして2年目に入った。第3学年における実施に向けて、第2学年の第3学期に希望調査を実施しているが、その結果からは、生徒たちが自分の進路希望や個性を考えたいうえで真剣にテーマを選択していることがうかがえる。担当教員にも、テーマによってコミュニティーチャーター、ALT、そしてビデオの活用、時間外の校外見学など、種々工夫をこらして取り組んでもらっている。



ALTと英会話

次年度のテーマ設定や計画は、現任校の教員が立案することになるが、実際は、教員の異動があるので指導に苦労してもらっているテーマもある。今後は、担当する教科の教員なら誰でも指導できるテーマ設定を考えなければならない。本年度の場合、学級数の減少に伴い教員数が減り、予定していたテーマ数が開講できない教科も出てきた。次年度以降も同様のことが考えられるので、担当者数等も考慮する必要がある。

また、テーマによっては物品が必要な場合があり、初年度は希望のあったテーマについて学校より出費をお願いした。今後も物品購入の必要が生じた場合、その出費については新たな検討課題になると思われる。

3 その他参考となる事項

「総合的な学習の時間」のテーマとその内容は、本校のホームページで紹介している。

奈良県立奈良工業高等学校ホームページ <http://www.nths.ed.jp>

事例番号31 高等学校 総合的な学習の時間の部

総合的な学習の時間を生かす教育実践の在り方

奈良県立高田高等学校 総合的な学習の時間「探究」 桐山信一、阪田安弘

1 実践内容

平成6、7年度に文部省、奈良県教育委員会の指定を受け、「生徒の能力、興味・関心に応じて多様な選択科目が履修できるようにするための教育課程の編成・実施上の工夫」を主題に研究が進められた。その中で、生徒たちに自主的・主体的な学習姿勢をどうやって身につけさせるのか、学習に対する意義や学



ぶ喜びを見いださせるにはどうすればよいのかといった問題の解決を期して、平成8年に合科カリキュラム的な総合学習を意識しつつ、新教科「探究」が生まれた。「探究」では、1年生に設定した4つの科目「やまと学」、「海外事情」、「環境」、「福祉と共生」において、複数教科の教員によるチーム・ティーチングの授業が行われた。各教科の教員が授業で実施している手法を発揮しての手作りの教材が生徒の学習心をつかみ、学校的知識を越えた学びを経験させることができ、教室での一斉授業では不足しがちな思考力・表現力の基礎が育成することができた。生徒の授業評価では、積極的に取り組めたとする者が約8割、興味を持てたとする者が約7割、得たものがあるとする者が約7割など、好結果を得ている。このように、平成15年度に教科「探究」が総合的な学習の時間「探究」となるまでに、そのための教育内容や教員組織の運営手法は着実に蓄積されていった。平成11、12年あたり

をピークに、全国からの講演依頼が殺到し、各科のチーフが対応に追われた。同時に、高田の「探究」の名と実践は全国へ広がった。平成13年になると、実践を継承・発展するために、各科の指導案・授業記録・授業プリントなどを総合的に盛り込んだ資料集として私家版ではあるが、「探究科の実践と分析 - 総合的な学習に向けての発信 - 」が発刊された。これにより、高田の「探究」の実践は地元の県内高等学校にも普及した。

「環境」 紫外線の観察

「海外事情」留学生との交流



「福祉と共生」ディベート

「やまと学」発表会

上の写真は、各コースの活動の一例である。

平成15年度は、総合的な学習の時間「探究」としてのスタートの年となり、前年度から行われてきた評価研究をもとに観点別評価を実施し、「探究」と各教科との連携、生徒の進路指導との連携を密にする教育実践をさらに進めることとなった。平成16年度は、生徒の多様な進路選択に対応すべく、従来の4コースに加えて、新しく「芸術・文化」、

「教育基礎」の新コースを実施し、各教科との連携を模索しつつ、学校的枠組みを越えた現実や文化と直結した学習とするため、多彩な外部講師による授業の充実を行った。このような学習により、生徒は自己の進路を切り開く力をつけることができると考えた。事実、本校では探究で学んだ内容と関連する進路選択をする生徒も少なくない。各コースにおいて、具体的には次のような授業改善の手だてを講じた。

環境：水、土、太陽紫外線、ゴミをテーマにした環境教育クロスカリキュラムの実施。

やまと学：日本史と古典による郷土・歴史に関する統合的指導の実施。

海外事情：共感的理解の視点から留学生との交流会などの体験学習の実施。

福祉と共生：共感的理解の視点からフィールドワークの充実。

教育基礎：「いじめ」「不登校」などの今日的課題に関する講演と実習。

芸術・文化：桐竹勘十郎氏による講演・人形浄瑠璃「義経千本桜」の創作。



「教育基礎」発表会

「芸術・文化」人形浄瑠璃の公演

その結果、2つの新コースがともに充実した内容となり、生徒による授業評価でも、文章力や表現力が獲得されたとする割合が例年以上に高まった。

左の写真は、新コースの活動の一例である。

なお、平成18年度開設の教育コース（1クラス）の生徒については、「教育基礎」を履修することになる。

2 成果及び課題

以上のように、平成8年度から実施された教科「探究」は、生徒の学習意欲を引き出すことに成功し、本校の特色の一つとなり、さらには全国における総合的な学習の時間の先駆けとなる実践となった。平成17年度の「探究」は、次の二つの課題をもって新しい教育内容の実践に取り組むことが求められている。

一つは、教科との関連を重視した協同学習の実施と新しい発表形式の模索である。従来の発表形式を見直し、教科の内容とより関連させた学習の総決算となる発表の形式を模索しなければならない。もう一つは、生徒の進路選択に適応した教育内容の再編成である。一人一人の生徒が進路実現のために、知・徳・体のバランスの良い発達を保障し、実質的な学校生活を確立するという全体的な視点から「探究」を再考し、新しい学習内容・運営の在り方を模索することが大切である。

3 その他参考となる事項

- (1) 桐山信一、奥田 智ほか：「探究科」の実践と分析-総合的な学習に向けての発信-、2001 奈良県立高田高等学校私家版
- (2) 奈良県立高田高等学校ホームページ：<http://www.nar-takada-h.ed.jp/>

「インターンシップ」を基とする「生きる力」の育成

奈良県立室生高等学校 西浦太衛門

1 実践内容

本校生には、不登校傾向、コミュニケーション力・人間関係構築力の不足、自尊感情の欠如、低学力など多様な課題を抱えて入学してくる生徒が少なくない。その生徒に「生きる力」を身につけさせるため、従前より体験的な学習に力点を置いた教育活動を展開してきたが、その中心となるインターンシップは平成12年度より実施し、初年度の当該学年主任として、続いて進路指導部長としてこの取組を推進してきた。



本校のインターンシップは、自分の進路を確かなものにするため、望ましい勤労観、適正な職業観を養い、職業人との交流を通して、コミュニケーション力を高め、今後の進路実現に生かす態度を身に付けることを目的に第1学年全員(3クラス120名)を対象として実施した。また段階的かつきめ細かな指導を行うために、実施時期は2月の第1週の3日間とした。同時にこの体験と成果を生かしたキャリアガイダンス学習を2,3年において計画的・継続的に展開することで、在学する3年間において自己模索からありたい自分、あるべき自分への変容を求めることを視野に実施したものであった。

初年度のインターンシップは、進路指導部長が受け入れ事業所の開拓を、年間の指導計画と生徒の学習教材の作成を学年主任が担当して進めた。学年の生徒全員を対象とするインターンシップは県下の高等学校で初の取組であったが、先生方の協力を得て1年間にわたる指導計画と学習教材「インターンシップノート」を完成することができた。インターンシップの展開は次のとおりである。

事前学習...職業意識アンケート、先輩による就業体験発表、個性・適性・職業を考えるR-CAPの実施、職場プロフィール(実習事業所の簡易求人票)研究、感想文集を用いての実習内容研究、R-CAPの結果を用いての職業適性の把握と実習事業所選択、実習先志望理由書作成、生徒プロフィール(簡易履歴書)作成、生徒による事業所への電話連絡、事業所事前訪問、直前学習。



インターンシップノート・感想文集

インターンシップ...3日間の就業体験、日誌の記入、職場の方々へのインタビュー。
事後学習...グループ討議、感想文集の作成、体験発表事前学習、体験発表会、代表生徒5~6名による1年生に対する体験発表、事業所事後訪問(感想文集持参)。
受入事業所との連携...奈良県中小企業家同友会例会への参加、同友会会員事業所との懇談会の実施、12月およびインターンシップ期間中の教員による事業所訪問。

インターンシップを経て、生徒のほとんどが学校生活に積極的に取り組み始めた。この変化を捉え、第2学年ではインターンシップでの経験を踏まえて自己の適性と職業についての考えを深める学習活動(現「ありがたい自分プロジェクト」と呼称)を展開し、希望の職業に就くための進路経路や自己の課題とその解決方法についての考えを深めさせた。第3学年では、進路別学習(同「キャリアガイダンス」)を導入した。これは単に学力を高めるものではなく、就職・進学に合致したそれぞれの進路達成のための学習活動である。具体的には、就職希望者は、求人票の読み取り方、求人票を用いての事業所比較、志望動機書作成による職業観の深化等に、進学希望者は、進学目的に合致した学校選択のための学校比較、進学費用確保についての知識を広める進学マネープラン、志望動機書作成による進学目的意識の深化等に取り組んだ。また職業適性検査の結果を用いた学習活動も行ったが、その際、個々の生徒が自己の特性(長所)を把握し、その特性に応じた職業を選択する一助となるように、学校独自のワークシートと指導案を作成して学習活動を展開した。



インターンシップ

インターンシップからキャリアガイダンスにいたるこれらの学習活動は、平成14年度入学生から総合的な学習の時間に位置付けたが、各学習活動の目的・計画・教材が明確になっていたことで、スムーズに移行することができた。

2 成果及び課題

インターンシップを基とする学習活動を通して、生徒のほとんどが自己の課題を発見し、成長の場としての学校を再認識し、学校での諸活動に積極的になった。具体的には、中途退学の減少、欠席・遅刻の減少、言葉遣い・マナーの向上、学校行事・委員会活動・ボランティア活動への積極的な参加、学習や各種検定への挑戦などである。この変容を通して、生徒達は、自己肯定感、社会・集団の一員としての自己認識、自己実現を図るうえでの課題、学校生活の目的、将来への展望などを発見・獲得し、主体的に自己実現を図る力を身に付けつつあると言える。

平成18年3月末に閉校となる本校には、最後の卒業生全員の進路実現という課題がある。特に就職希望者はここ数年間厳しい状況におかれているが、この取組をはじめとする本校教育活動に深い理解を示し、求人依頼に応じる事業所も現れた。また、例年、本校において培った「生きる力」を粘り強く発揮し、卒業間近に進路希望を実現する生徒も多数いる。保護者、外部機関との連携を密にし、進学・就職両面において可能な限りきめ細かな支援・助言を行い、生徒が真に「生きる力」を身に付ける教育活動を最後まで展開していきたい。

3 その他参考となる事項

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書
国立教育政策研究所ホームページ <http://www.nier.go.jp/>

事例番号33 障害児教育諸学校 障害児教育の部

- 『個別の教育支援計画』の策定が叫ばれる今、知的障害養護学校が果たすべき役割は
- 『自閉症の障害特性に合わせたアセスメント「PEP-R」検査の実施について』 -

奈良県立大淀養護学校 教務部「PEP-R」検査と自閉症発達支援教育研究グループ

1 実践内容

(1) 自閉性障害の子ども達への理解を深めたい！

平成14年度からの『新学習指導要領』の完全実施に向け、本校では平成12年4月、「一人ひとりに視点をあわせた教育課程作り」がスタートした。

その第一歩として、自閉症への理解を深めるため京都市児童福祉センター児童精神科医村松陽子氏をお招きし、『自閉症の子どもとのコミュニケーションについて』と題し研修会を行った。

そこで、誰もが「自閉症及び発達障害を持つ子ども達への特別な教育的支援の必要性」を感じた。そして、よりよい個別の指導計画を作成するには、「障害特性の理解と共に、的確なアセスメントが必要である」ことを痛感し、自閉症の子ども達に必要なだと考えたのが、フォーマルな検査「PEP-R」であった。

京都市児童福祉センターにおいて村松先生のご指導のもと、臨床検査場面を通して2事例の研修の機会を得た。(平成12年12月)

リハビリセンターから検査器具を借用し検査の研修を実施した。(平成13年1月)

(2) 「PEP-R」検査を教育課程の中に位置づけよう！

教務部を中心に、平成14年4月、「本校独自の教育課程づくりも大切にしながら一方で、一人ひとりの特別なニーズに合わせた教育支援計画を立てるため、自閉症及び発達障害の特性にあった「PEP-R」検査を取り入れ、課題設定と指導計画にいかしたい！」という機運がますます高まってきた。

折しも平成14年秋「今後の特別支援教育の在り方について(中間まとめ)」が出された。障害のある児童生徒の教育をめぐる諸情勢の変化として、知的障害養護学校では、自閉症の児童生徒に対する適切な指導法の開発が求められた。本校においても、その必要性は校内に止まらず、家庭や地域からも自閉症の障害特性に合わせた教育的支援の専門性や重要性が強く求められるようになってきた。

平成14年10月 京都府立向日が丘養護学校のPEP-Rの実践研修会に参加

平成14年11月 検査器具の購入と教務部主催「PEP-R」の研修会を実施

平成15年度からの本格実施に向け、最終準備として6月に、NPO法人それいゆ自閉症支援専門家養成センターに於いて『PEP-R講座』を受講し、検査グループで伝達講習会を行った。

(3) 検査の実施

対象児(平成15年7月より検査開始)

自閉症・自閉性障害・自閉的傾向・広汎性発達障害と診断を受けた児童生徒が、検査希望を申し出た場合、教務部が学級担任と連携をとり実施計画を立てる。

検査実施までに

検査チームと学級担任は、インフォーマルな情報(『個別の指導計画』『家庭訪問



・懇談の記録』)を共有するため、打合せ会をもつことにした。その中で「現在困っていること・指導で行き詰まっていること」を確認し、検査結果を「何に・どうい
かせばよいのか」整理し、検査の組立てに反映させている。また、普段の様子を知っ
ておくため検査日までに授業の参観を実施している。

検査(所要時間は、約2時間。AM10時~12時まで校内出張の形で実施。)
事例毎に各学部から1名ずつ計3名で検査チームを組み、検査・記録・ビデオ撮り
の各役割をローテーションしながら進める。

検査報告会

検査実施後、2週間以内に検査報告書を作成し、検査ビデオを視聴しながら学級
担任への検査報告会を実施する。その後、学級担任の要望に合わせた形で保護者報
告会を行う。

実績

平成15年度から始めた取組も今回で3年目を迎え、検査者の育成にも着手し、検
査グループの構成員も増えた。その結果、時間的に余裕のある夏期休業中も利用する
ことで、年間7、8件の検査実施が可能となった。

2 成果及び課題

「できる・できない」だけを見るのではなく、「めばえ反応」を引き出すのがこの検
査の大きな特徴である。検査中の様子を丁寧に行動観察して全てを記録し、各領域の合
格項目とこれらの記録をもとに考察を加え、「コミュニケーション指導、わかりや
すい環境作り(場所の構造化、スケジュール・終わりの伝え方など) 個別課題プラン」に
いかしている。学級担任からは、「検査の結果は、指導計画を立てる上で、アプ
ローチの出発点や方向性に“正確さ”を与えてくれた。」との声大きい。保護者
からは、「優れているところや弱いところがよくわかった。」「隠れた力がわ
かり励みになった。」「どんなことに苦しんでいたのかビデオを通してよく
わかった。」などの感想を頂いている。このように、学校では『個別の指導
計画』の作成、家庭においては放課後や休日の過ごし方を見直す貴重な機会
となっている。また、検査結果を共有することで両者の連携も強くなってき
ている。

しかし、課題もある。計画 実践 評価の過程で、学級担任からのニーズに
応えられるだけの十分な時間が、確保できていないということである。また、
地域の小学校から「PEP-R」検査の依頼が増え、高まりを見せているが、
人的・時間的な制約がある中で、100%期待に応えることが困難な状況
にある。平成18年度から、発達障害支援センターが、仔鹿園でスタート
する。本校としては南部の自閉症教育のセンター的役割が担えるように、
検査員の確保やシステム作りの構築が必要となってくる。

よりよい『個別の教育支援計画』の策定を目指して、今後も引き続き、
それぞれの発達や特性に対応したフォーマルなアセスメントの導入を
押し進めていきたい。

3 その他参考となる事項

新訂 自閉児・発達障害児 教育診断検査 心理教育プロフィール(PEP-R)の
実際 E.ショブラー/茨木俊夫
研究グループ構成メンバー: 北井美智代、辻本寿美子、田中仁、吉崎純子、
山口真二、田畑厚美、横澤みなこ

小さな部屋からの発信 「生きる力」をはぐくむ健康教育

奈良県立香芝高等学校 藤岡 夏枝

1 実践内容

生徒を取り巻く社会環境が大きく変化し、対人関係が希薄になり、身体的な不調を訴えると共に、人間関係のトラブルをはじめ、自立と依存のはざままで思春期の様々な「心の揺れ」を訴える生徒が、多数保健室へ来室する。また、携帯電話等の情報機器の普及や多様な性産業の出現等によって、中高生の性意識や性行動が変化してきた。本校においても、生徒の変容を認識し、適切な意志決定と、行動選択ができる能力や態度を育てることを目標に、学校教育活動全体を通じた健康教育に取り組んだ。



(1) 保健室における健康相談活動としての取組

平成10年から保健室に、生徒が自分の思いや悩みを自由に打ち明ける『何でもノート』を置き、養護教諭が返事をするこゝで、心の成長を促す一助としている。

『何でもノート』は、生徒にとって、自分の本音を語り自省できる場であり、人の境遇にも触れ、一人ではないと思える場である。また先輩からのアドバイス(ピアサポート)を受けたり、養護教諭からのアドバイスで、前向きに進む思いを芽吹かせ、生きる活力を満たしてくれる場ともなっている。保健室が、人と人を結ぶネットワークの場であれば素晴らしいと考えて現在18冊、ノートの厚さと共に、生徒と養護教諭を結ぶ心の絆や信頼感も深まっている。今、保健室は、体の病をケアするだけでなく心の成長を促す場として大きな意義があるのではないだろうか。 「何でもノート」



保健室において、生徒が気軽に自分の思いを話すことのできる雰囲気を作るために、「癒しのCD」をBGMとして流した。また保健室準備室には、応接セットを整備し相談コーナーを設置した。これによってプライバシー保護ができ、個別相談や保護者面談時にも活用できた。更に、性教育等の教材や資料の収集・保存について検討し、生徒が知りたい正しい情報を、気軽に学習することができる学習コーナーを設置した。また、コンピュータを設置し、インターネットによる情報の検索や、保健室における各種の統計や調査等に活用し執務の効率化をおこなった。

(2) 学校全体の「性教育」への取組 (全校生徒・教職員・地域)

教職員の共通理解を図るために、教職員研修と演習を実施した。初年度の内容は、「HIV と人権」についての講演と、ヤングシェアリングプログラムという演習を実施。次年度は、学校保健委員会を拡大し、教職員・PTA役員を対象に「現在の若者の性行動とエイズ/性感染症流行」についての講演、および保健師による、「若者の性の実態等について」の講義を受けた。

生徒・教職員・保護者を対象に生徒指導部・保健体育部・総務部と連携し、講演会を実施した。講師は、思春期外来も受け持つ産婦人科医や助産師等で、講演会後には、保健室準備室において希望者を対象にプライバシー保護の配慮をし、講師による個別

相談を実施した。平成17年度からは、1年生を対象に保健体育科と連携し、年間行事に位置づけ自尊感情を高める内容の講演会を実施している。

2年生を対象に、「思春期の性とこころ」というテーマで、LHRを実施した。指導案は養護教諭が作成し、指導案の他に事前指導・ワークシート・事後指導・各種統計資料を作成し、どの担任でも展開しやすい内容であることに重点をおいた。授業を行う前にアンケートを取りクラスの実態を把握し、担任と養護教諭が十分な打ち合わせを行なった。

学校においては、教育相談委員会を立上げ、家庭・地域・関係機関との連携もとった。

(3) その他の取組

本校における取組を、奈良県高等学校等養護教育研究会中部ブロックの養護教諭に紹介し、性教育の取組を広げた。養護教諭を対象に意識調査や学習会を実施し、職員向けの『ほけんだより』を作成した。また生徒の実態にあった性教育の講演会を各校で実施したり、保健室における性に関する個別相談の実態把握等を行なった。現在は、班別研修において個別指導資料・教育教材(CD-R)・指導案等を作成し研修を深めている。

2 成果及び課題

- (1) 健康相談活動が充実することにより、生徒は、主体的な判断や行動ができ、よりよく問題を解決する力(生きる力)を身に付けることができる生徒が増えた。また、講演会等の取組を継続した結果、生徒の感想文から、「自分の命の大切さ、両親への感謝の気持ち」を感じる生徒が増え、自分の行動に対する判断力や、意志決定の一助になった。
- (2) 校内研修や、外部講師による講演会等の取組を続けた結果、教職員から前向きな意見が多く聞かれるようになり、講演会に対する評価が高まった。また、学校保健委員会に、教職員や保護者をはじめ、学校医や保健所及び各種団体等に参加を求め、広い視野で考えることのできる研修会を企画することで、学校が行なう健康教育の必要性が理解され、家庭や地域等との相互の連携を深めることができた。
- (3) 「生きる力」の育成をめざして、あらゆる教育活動の中で取組を展開し、保健室もその役割の一端を担っているものの、自己表現力・コミュニケーション能力・問題解決能力・セルフコントロール能力等の「生きる力」が欠落している生徒が依然多く、取組はまだ不十分であるといえる。生徒の実態を見ると、今後より一層、発達段階に応じた性に関する科学的知識を身に付けさせるとともに、生命を尊重する態度や自尊感情を高める教育、更には他者との関わりの中で人間関係を深めながら、自己解決能力の育成など、心の教育の必要性を感じる。そのためには、養護教諭として、生徒の体の成長に伴った心の発達を支援する健康相談活動や保健教育を充実させ、生徒自らが、心身の健康を保持増進する実践力を育成できるよう健康教育の充実を図っていきたい。

3 その他参考となる事項 (研究発表)

- ・平成15年8月6日～8日、第33回全国性教育研究大会(栃木県)
高校における性教育の実践発表 - 小さな部屋からの発信 -
- ・平成17年8月4日～5日 平成17年度全国養護教育研究大会(奈良県)
課題別研究協議発表 - 豊かな人間性を育む性教育 -

1 実践内容

高等学校で弓道部の顧問として18年、現任校で4年目を迎える。弓道は28M離れた直径36CMの的を射抜くという単純な競技である。しかし、平常心の確立、集中力の持続という現在の高校生に最も不足していると思われる部分を克服しなければ勝利に結びつかない。また試合中、監督は一切の指示、発声が禁止されており、生徒自らが日常の鍛錬によって、自立心や自律心を身につけることが求められる。私はクラブに所属してくれた全員が人間的に成長し、達成感を持って卒業し、社会人として正しい道を歩んでもらいたいと願っている。



以上のことから、次の4項目を重視した指導を行っている。

(1) 礼儀作法の徹底と挨拶の励行

最近、目上の人に対してどのように接していいかわからない高校生が増えているように思われる。行動や態度、言葉遣いなど弓道を通じて学ばせたいと思い、まず先生や先輩に対して正しい敬語を使えるように、自然に楽しく会話ができるように指導する。特に一年にとっては、初めての経験になるので、失敗を恐れさせず、間違った場合でもその場で先輩に注意させる。また、学校内は勿論のこと、通学途中や家庭でも爽やかな声で挨拶ができること、特に、いつでも、誰が相手でも、同じ態度をとることが大切である。平常心を保つことにより、どのような大舞台でも常日頃の実力を発揮できることになる。

(2) 『自己修正能力』の習得

失敗した時、うまくいかなかった時などに原因を他に求めるのではなく、素直に自分を見つめ直すことができるように、謙虚な気持ちと目的に対する明確な向上心を養う。壁にぶつかったときが成長の大きなチャンスであり、勇気を持って自分を反省し、修復することが次の成功への一歩となる。挫折こそが新たな自分を見つけるきっかけであり、仲間や親への感謝の気持ちを再認識できるであろう。

(3) チームの一員としての自己の発見

部員80余名という大所帯では、メンバーから外されたり、レギュラーになれなかった悔しさなどで自分を見失うときもありがちである。そのときには『サポーター』としてレギュラーが最大の力を試合で発揮できるように自分の役割を発見させる。効率的な練習の支えであってもよし、精神面で支えてもよし、要は自分の存在価値を自分で発見させることが大切である。クラブの中の自分の存在、自分の中のクラブの存在を謙虚に捉え、自己啓発に繋げていきたい。

(4) 効果的な休暇の設定

「いかに練習するか」と同様に、「いかに休ませるか」が重要である。上手くなりたい、強くなりたいという生徒のモチベーションを引き出すには、疲れ果てた体力、精神力では不可能である。体調によっては、休みを個人的に設定する場合もある。またその休みをどのように活用するかも、生徒の自己管理能力を大きく成長させるための機会となる。毎日の練習後の家庭生活のあり方や、長期休業中の学業の計画など絶えず目標を持って効率良く過ごすかによって、部活動と学業の両立が可能になる。

その他、清掃のボランティア活動、高校生対象の各種研修などにも積極的に参加させている。これは、生徒に社会の一員であることを自覚させ、高校での部活動の経験が、将来社会人になったときの土台となり、あらゆる困難をはねかえす自信とエネルギーになることを願っているからである。

2 成果及び課題

平成15年3月全国高校選抜弓道大会
男子団体出場。ベスト16進出

平成15年8月全国高校弓道大会男子
個人出場。決勝進出。

平成17年8月全国高校弓道大会男子
団体、女子団体、女子個人出場。

女子団体ベスト16進出。



以上が現任校での弓道部の主な成果であり、平成17年度インターハイ選手及びサポートしてくれた部員、生徒を見守っていただいた教職員や保護者に心から感謝したい。部活動で学んだ礼節、自己修正、自己発見、自己管理を社会人としての素

養として卒業後も生かしてもらいたい。また、弓道部の卒業生が就職し、「先生に教えられたことの本当の意味が、社会人になって実感することができました。」と感謝されたことが、これまでの指導の本当の成果ではないかと思っている。

今後も、多様化する生徒個人の進路希望に対して、いかに自己実現を図るか、また、気持ちが弱くなりがちな昨今の高校生をいかにサポートできるか、ということが、一層取り組んでいかなければならない課題だと考えている。私は、顧問である前に、数学科の教師であり、第一学年の学年主任である。教科や学年での指導においても、弓道部顧問としての指導と同様の姿勢で、多くの生徒が悩んでいる部活動と学習の両立という課題を生徒とともに取り組み、将来、社会の構成員として幅広く活躍できる人材を育てていきたい。

3 その他参考となる事項

奈良県立平城高等学校ホームページ <http://www.heijo-hs.ed.jp>

無限の可能性を求めて

- 野球部指導の実践と成果について -

奈良県立片桐高等学校 安井 浩

1 実践内容

私にとって現在の野球部指導の原点となったのは、初任校である広陵高校での第57回選抜高等学校野球大会出場である。その後、高田高校に転勤し、前任校での貴重な経験をなんとか生かしたいと思い、まず取り組んだのが、選手たちの意識改革であった。部員数は20名前後と少人数で、しかも、練習の場所や時間に制約があるという環境に恵まれていない中で「甲子園出場」という目標を達成するために、強豪校の何倍もの練習をしなければならないことであった。私はそれを練習量に求めるのではなく、練習の質に求めようと考えた。部員20人程度でどうやったら甲子園にいけるのか、試行錯誤が始まった。県内外の強豪校や甲子園常連校に胸を借りて練習試合を繰り返し、選手たちにそのプレー・雰囲気・マナーなどを肌で感じさせると同時に、私も指導者の方々からいろいろと学んだ。



また、指導者講習会に何度となく足を運んでメンタルトレーニングや栄養学等を学び、練習後に補食を導入したり、野球以外のスポーツを練習に取り入れられたり、手作りの練習道具を作ったり、手作業で黒土を入れてグラウンドを作り直すなどチームに生かせるものを積極的に取り入れた。その甲斐あって平成11年の春、念願の甲子園出場を果たし、1回戦にも勝利を収めた。

現任校では、これまでの経験をより発展させる形で練習の体系を作り、心・技・体のバランスのとれた練習を心がけて実践している。特に、「人間力を鍛え、磨き、高める。」ことをチームの方針としている。目標を達成するためには、日々練習して習得した技術を100%公式戦で出すことに加えて、チャンスをものにしたり、逆にピンチを凌いだりする力が必要であり、それを発揮するためには野球の技術力以上に「人間力」が大切だと考えている。例えば、けじめのある生活を送ること、授業に集中し学力を伸ばすこと、気持ちよく挨拶ができること、服装が整っていること、ゴミを見つけたら自然に拾えること、トイレの下駄が乱れていたら揃えられることや、親・友人など周りの人に感謝できることなどである。

その具体的な指導として、つぎのようなことを実践している。

目標達成用紙の作成・・・長期目標から短期目標の設定と日々の生活の中での行動目標（10項目）の設定。

日誌を書く・・・できるだけ簡単に記入できるように、30項目を5段階で自己評価を行い、200字程度の作文で一日を振り返らせる。

休日の練習前清掃・・・土・日・祝日・長期休業中に、自分を見つめ、心を鍛え磨くという意識で、グラウンド内だけでなく校舎内外の清掃を20分間する。

ウォーミングアップの中でのメンタルトレーニング・・・練習の質を高めるために約20分間、音楽を活用し、リラクゼーション・メディテーション・サイキングアップ

をする。その日の練習目標を設定し、最高の心理的状态で練習に臨む。また、練習や試合でゾーンを感じ作るための心的準備をする。練習試合・公式戦でも同様のメンタルトレーニングを行う。

試合中のスキル・・・プラス思考、呼吸法、スマイル、セルフトーク、フォーカルポイントを見る、自分のルーティンというスキルを実行する。このようなセルフコントロールを行うことで自分の持てる力を100%出せるようにする。

心理テスト(DIPCA)の実施と講習会への参加・・・心の状態をグラフ化し、弱点が目に見える形で各自のメンタル面の現状把握をする。年2回の1日講習会(過去には東海大学高妻先生や元アナハイム・エンジェルス of メンタルトレーナー、ケン・ラビザ博士の指導を受けた。)と本校での年10回程の講習会でメンタルトレーニングを学ぶ。

本の音読・・・毎年1冊以上の本を部員全員に配り、練習後に音読させる。同じ時間を共有し音読することで、チームの意識や個々の意識を向上させる。過去に「大リーグのメンタルトレーニング(ケン・ラビザ、トム・ヘンソン著 高妻容一監訳)」「スラムダンクの勝利学(辻秀一著)」等を読み、今年は「プロフェッショナルシンキング(児玉光雄著)」を読んだ。

積極的な休日・・・月曜日を休みとし1週間の節目を作ると同時に、次の1週間にむけての身体的・心的準備を行う。

その他、ユニークな練習として定着したものに、地下足袋を履いてのトレーニング、スリッパを使っての内野守備練習、イメージノック、アクロバットスロー、バランストレーニング、ビジョントレーニング、シーズンオフのラグビー練習、ちゃんこ合宿などがある。そして、この春の大会ではメンタルトレーニングの応用として「感性を研ぎ澄ます。視野を広げる。信頼を作る。」ということを目指して、私からは全くサインを出さずに、プレーしている選手の判断だけで公式戦を戦わせた。

2 成果及び課題

平成13年の夏の奈良大会で準優勝したときには、甲子園に行けなかった悔しさが残ったが、準決勝戦で強烈に心に残ったプレーがあった。同点で迎えた八回二死一・二塁。カウント2 - 1と追い込まれた選手が、自分の判断でサード前にセーフティバントを決め、相手チームの敵失を誘い決勝点を招いたプレーであった。ファウルになれば打者アウトとなる状況での決断で、その選手は、「100%成功する自信があった。」と答えた。冷静、自主、自立など精神的強さがチームの柱となり、それがこのプレーに集約されていたと思う。

これからも選手たちや私自身に「意識が変われば、行動が変わり、習慣が変わり、人格が変わり、最後に運命が変わる。」と言い続け、無限の可能性を求めるとともに、それに挑戦していきたいと考えている。

3 その他参考となる事項

奈良県立片桐高等学校ホームページ <http://www.katagiri-shs.ed.jp/>

部活動を通して「自己を磨き、未来に挑戦する」生徒の育成について

奈良県立榛原・榛生昇陽高等学校 徳地 末広

1 実践内容

私が自転車競技の指導に関わったのは、奈良国体(わかくさ国体)が開催される4年前の昭和55年のことである。当時、奈良県には自転車競技専門部が存在せず、未普及種目としての強化方針が出された年であった。前任校である北大和高校に、専門スポーツ指導員として配属を受け、自転車競技部がない高校現場で指導することになった。部員の確保からのスタートが今でも強く記憶に残っている。



当時、県内では、自転車競技というスポーツはマイナーと言うよりは、ほとんど知られていないのが現状であったように思われる。この時点で他府県の歴史は、すでに三十数年を刻んでおり、産声すらあげていない本県の自転車競技の進む道は真っ暗で、専門部を立ち上げる自信は、全くと言っていいほどなかった。手探り状態で部員を確保し、一般国道ではロードレーサーの乗り方の指導と交通ルールの指導を行った。また、競輪場では高校生が練習する前例もなく、自由に使用できない中で、トラック練習を繰り返した。初レースは、自分の指導力の最初の発表の場であった。私の気持ちを代弁するかのように緊張感とやる気に満ちた顔をした生徒が、何かをやってくれそうな期待感をもたせてくれた。しかし、成績は予選突破がやっとという状況で、予想をしていた結果との落差に、生徒も私も大きな挫折感を味わった。生徒は、練習に対する気持ちの甘さや練習量の不足を痛感し、私は競技の指導者として無限の難しさに直面したが、自分の能力に磨きをかけたい生徒達は新たな決意をもち、早朝練習を申し出た。結果的には生徒に引っ張られる形の中で、強化練習に取り組むことになった。その成果は、翌年の近畿大会、インターハイに少しずつ現れ、島根国体で初の全国大会入賞者を出し、強化への第一歩を踏み出せたのである。しかし、順調に進む予定であった強化は生徒の退部等で大きな壁にぶつかり、昭和59年の国体には不安をもったまま、新入生を3年間で育てていく計画を立てて臨まなければならなかった。全国の強豪チームに引けを取らないほど練習量を積み重ねていくにつれ、生徒は大きな自信と強い精神力を培い、その年のインターハイには見事に団体ロードで2位、個人種目で3位、総合成績で5位という創部4年目での快挙であったように思う。

自転車競技で大切な強い精神力と思考能力、自己のコントロールにおいて挑戦できる能力をもった生徒に支えられた11年間を北大和高校で経験できたのは、競技の指導者として生徒から与えてもらった財産である。おかげで、転勤後の榛原高校で創部する際、大きな自信と夢をもって部員募集ができ、胸を張って、指導者としての自覚をもつことができたように思う。

榛原高校では、1年間の同好会を経て、部に昇格した。この時の部員達は途中で挫折することなく、3年目で近畿大会総合3位、国体4位入賞など素晴らしい伝統を築き、後輩に素晴らしい贈りものをしてくれた。まさに高校教育の部活動の原点と言っても過言ではない雰囲気を作り、努力が必ず結果に繋がることを実証してくれた生徒たちであ

った。その後も近畿大会総合2位、国体3位、昨年は近畿大会総合2位、全国インターハイ総合3位、団体種目では県高校新記録を樹立、国体でも団体種目2位、総合成績では少年2位と奈良県としては初の好成績を残すことができた。この背景には、国体前に生徒が落車による大事故を起こし、生徒の気持ちが落ち込んでしまい、強化練習に取り組むことが難しい時期もあった。しかし、怪我をした生徒の国体出場に対する執念と精神力の強さで重い空気をはねのけ、彼の意識と意欲に勇気づけられて大会に臨むことができた。榛原・榛生昇陽高校の生徒は、素直で、自己の能力を追い続ける素晴らしい気持ちと、自分のために挑戦することを恐れない、たくましい能力を感じさせるのである。

今年のインターハイにおいても、団体種目での予選1位通過という鳥肌が立つような好成績とともに、昨年に本校が記録した県高校記録を書き換えた。決勝戦では2位に終わったが、個人2種目、団体1種目に入賞し、総合成績5位という、昨年に続き総合入賞を果たした。

第60回国民体育大会（岡山国体）にむけては、団体種目での優勝の2文字に執念を燃やし、夏期休業中の疲れを感じる暇もなく、約2ヶ月間の強化練習を毎日繰り返した。目に見えないプレッシャーを感じてはいるものの、口に出すことや態度に出せない苦しさの中、私も、選手も日々がむしゃらに取り組んだ。結果は、団体種目4位、個人種目は3種目の入賞に終わり、当初の予定より残念な結果ではあったが、総合成績で5位という成績を残すことができた。この成績は、生徒一人一人が昨年以上の成績を残したいという強い信念と目標に向かって挑戦する気持ちが、日常の生活を含め、心身のバランスを上手くコントロールをした結果として表れたと思う。

2 成果及び課題

専門部が立ちあげられてから、25年が経ち部員数の確保は2校とも非常に厳しい状況ではあるが、競技力は間違いなく全国レベルを維持できる成果を上げていると確信している。また、本県で自転車競技部に所属をしていた卒業生たちの高校時代の経験が、学生として、社会人として、間違いなく人間としての在り方や生き方に強く関係していることは、大会の度に、応援として届くメッセージで感じることができ、競技力だけを求めるのではなく、人格の形成にも重きをおいている本県全体の取組の成果でもある。

私自身も、卒業生を含め、現部員の自己の目標に向かって努力を惜しまない強い精神力と、走りに命をかける（一走懸命）思いに支えられて、今日まで自転車競技の指導

者として信念をもって指導することができた。今後も、部員の確保に全力投球をし、自転車競技と出会った生徒が、自分の人生の生き方に自信を持ち、自己を磨きながら、何事にも諦めることなく挑戦できるように、生徒の育成に取り組んでいきたいと思う。



平成17年度高校総体4kmチーム・パーシュート準優勝（県高校新）
（千葉県松戸競輪場にて）

3 その他参考となる事項

奈良県立榛原・榛生昇陽高等学校ホームページ www4.kcn.ne.jp/~yam/syouyou/

